

本多猗蘭侯と服部南郭

中 田 勇 次 郎

はじめに

前年度は、本多猗蘭侯と荻生徂徠についての研究成果の一部を本学論集第十六号に紹介することができたが、今年度は、猗蘭侯が、おなじく徂徠門下であった服部南郭ときわめて親密な関係にあったので、本多猗蘭侯と服部南郭について、さらに研究を進めてゆくこととした。その研究調査のために、昭和五十八年七月下旬、わが史学研究所の所員等あわせて五名が、京都大学の日野龍夫氏の御紹介によって、東京都渋谷区東二丁目の服部家を訪れて、服部南郭先生の子孫にあたられる服部元義氏に会うことができ、その御厚意により、同家に秘蔵される多数の南郭関係の資料を拝観することができた。併せて品川東海寺の少林院墓地にある服部南郭先生の墓に参詣し、本学の藤井直正氏の手によって拓本などもとることができた。ついでもた、服部匡延氏の御紹介により、早稲田大学図書館を訪れて、司書の金子宏二氏に拝面することがかない、同氏より同大学図書館に寄贈されている服部文庫等について詳細な教示を受けた。また、昨年に引きつづいて公文書館内閣文庫において、本多猗蘭侯の関係資料の調査を行うことができた。そこで、これらの研究調査の成果をもふくめて、本多猗蘭侯について、かねてから進めていた考証の一部分を、今回の調査報告を兼ねて記すこととする。

南郭先生文集

本多猗蘭侯と服部南郭との交遊のあとをたどるには、両家の詩文集である猗蘭台集と南郭先生文集とを読むことが第一になすべきことである。本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

る。そこでまず南郭先生文集の方からとりあげることとする。

服部南郭は天和元年一六八三生、宝暦九年一七五九卒。名は元喬、字は子遷、小字は小右衛門、南郭と号し、室名を芙蕖館と称する。芙蕖館の号は徂徠の名づけたもので、現在もなお服部家に芙蕖館三字徂徠筆の板刻の額が存する。南郭はもと京都の生れであるが、十四歳のとき江戸に出て、元禄九年（一六九六）柳沢吉保に仕え、三十四歳のころまで仕官するが、のちに致仕して、宝永六年（一七〇九）、荻生徂徠の護園の塾が成って、そのころからまもなく徂徠の門下となって、いわゆる古文辞派の詩文を学ぶ。同年生れの安藤東野（一六八三―一七一九）とは親しく、同じく柳沢侯に仕え、東野もまた正徳元年（一七一）には、仕官から退いて家居し、徂徠の門下にあって学んでいる。退官ののちは本多忠統家の賓師となり、三十七歳で没するまで本多邸に住んでいる。本多忠統猗蘭侯は、元禄四年一六九一生、宝暦七年一七五七没。同じく徂徠の門に入り、東野、南郭ともきわめて親密な関係にある。服部南郭が本多忠統の猗蘭台集の序文を書いているが、そのはじめに、この三人の出会いを描いている。かつて南郭は東壁と親しかった。同じく柳沢家に仕官していたことにも関係があるう。南郭は東壁から、はじめて本多猗蘭侯のことを紹介されて、侯が学問が好きで、大名の仲間ではあるが、普通の大名とはちがって学問を楽しむ超越した人柄であることを知った。そののちまもなく、猗蘭侯が荻生徂徠をつれてきて紹介したので、（まずはじめに本多忠統が徂徠をつれてきているのに注目）南郭も、同盟の諸子とともに、侯の邸宅に遊んで、たえず酒席を設けて集会し、詩文を作って、大いに意気投合した。当時、明の中期に起った前後七子、とりわけ後七子の主導者であった李攀龍、王世貞の称えた古文辞の文学の提唱を受けて、わが国にもこの古文辞の学問を広めようとするものであった。それは魏文帝の典論の中に説いているように、文章は経国の大業、不朽の盛事という主張である。これについては後に訓読した猗蘭台集序にくわしい。これは単なる文学運動ではなく、詩文を作ることは文章道であり、文章道というのは国家的な立場にあって高い理想をかかげて、不朽の大業を果すものである。学問とは古文を学んでそれを現代に生かすことであり、文章はそれを遠く広く人々に伝えるものである、という、大きな希望に燃えてとりくむものである。そういう趣旨のもとに、徂徠を先覚の師長として、本多忠統および南郭、東野の三家、そしてさらにそれらと同盟の護園門下の人々が、この日本における古文辞の道を開いたのである。

そういう中で、本多侯がもっとも身近かに接触していたのが服部南郭であって、安藤東野が享保四年（一七一九）、で没し、享保十三年（一七二八）、徂徠が六十三歳で没してからのちは、護園の同志も次第に凋落して、平野金華、越智雲夢などの親しい同志が相ついでこの世を去って

ゆき、わずかに二三人のものが残るだけで、本多侯の身辺にいたのは服部南郭がもっとも主要な友人であったという状況であった。（南部の猗蘭台集序に見える）。本多猗蘭侯が没して、その墓誌銘を書いたのも、祠堂碑を撰したのもみな南郭であることを思うとき、いかに南郭がつねに本多猗蘭侯の身辺にあって、もっともよき理解者であり援助者であったかを想像することができる。要するに猗蘭侯のすべてを説きあかしているのは南郭であり、南郭を語らずして猗蘭侯を知ることはいかなることもできないと言ってよい。

南郭先生文集は、初、二、三、四編、各編十卷、全四十卷より成る。版本で行われている。（内閣文庫蔵本による）。初編は、首に享保十年（一七二五）十月の荻生徂徠の南郭初稿序、享保八年（一七二三）十月の本多忠統の南郭稿序、享保七年（一七二二）七月の平野金華の南郭集序がある。本多忠統の序は、大垣の守屋煥明（秀緯）が代書している。平野金華は自筆を刻している。初編の巻頭の標題の下に、平安服元喬子遷撰、江都望三英君彦輯、南部膝元啓維廸校（伊藤氏、号南昌、徂徠門下）とある。内閣文庫本では、初編巻九の末尾に、鹿門望三英（君彦、望はおそらく望月姓を修したのであろう）の享保甲辰（九年一七二四）八月の跋がある。その文に、「南郭先生、前に已に罹災して、平日の文稿、隻字烏有となる。是より先、余偶たま、私に先生の文若しくは詩若干を録して家に蔵してこれに備う。灰燼之余、歸然として独り存す」云々とあり、災害で失われた時期の詩文の稿本が望三英の家に伝わったのによって初編が成っていることがわかる。つづいてまた、「西台膝侯、身は藩任に居り、斯文に干城として、その士を愛し賢に下るの盛なる。蓋し諸侯に冠たり」といって、猗蘭侯の学者を愛しそれを尊敬する人柄は、大名中の第一人者であるという。「乃ち聞いて之を憂え、勸めて之を梓せしむ」とあり、南郭文集を刊行させたのが侯であることがわかる。また「亦この風の靡くところ、豈に特に先生の力のみならんや、実に膝侯の賜、偉なる哉」という。猗蘭侯の援助によって南郭の文集が刊行されたことがわかる。初編巻九末の刊記には享保十二丁未（一七二七）秋九月日、江都書肆嵩山房、須原新兵衛梓行とある。二編には、東都源君嶽輯校とある。源君嶽は松下烏石のこと。南郭の門人。書家で著名な人物。巻末に、元文二年丁巳秋（一七三七）本多忠統の跋があり、刊記には元文二年秋九月嵩山房とある。第三編は、東都熊元朗華玉輯校とあり、刊記に、延享二乙丑冬霜月（一七四五）江都嵩山房とあり、四編には男雄仲英輯（南郭の子、元雄、字仲英）とあり、南郭の子が校正にあたっている。刊記には、宝暦八戊寅（一七五八）夏六月日嵩山房とある。ただし、四編の末尾には、従四位下侍従源頼順撰（守山藩松平氏安永三年七月六日没）、南郭服夫子墓誌銘をのせている。しかし、南郭の没したのは宝暦九年（一七五九）六月二十一日で、文集の刊記より一年後にあたる。従って内閣文庫本について言えば、実際の刊行は宝暦九年六月

以降ということになる。刊行が刊記より後れることはとくにめずらしい例ではない。

南郭先生文集初編の内容は先生の詩文を集録したもので、まず、擬古樂府にはじまり、五言七言の古詩、五言六言七言の律詩と排律と五七言絶句の順序で収録されている。各区分の内容は、ほぼ製作の古いものを先においているようである。次に、文章は、文体別に、序、記、論、雜文、銘、墓碣、祭文を収め、おわりに書牘をまとめて入れている。二編以下もほぼ同様で、文章の文体の種類には、贊、説、碑、墓誌、題跋などが増加されている。各編以下同様である。はじめの韻文に古樂府を収めているのは、古文辞派の文学はとくに漢魏の古樂府を尚ぶからで、とくにこれを巻首に出している。徂徠集や猗蘭台集においても同様である。この場合は、南郭集では樂府題として、漢の鏡歌に倣った朱鷺以下十八首という大作をのせている。古詩においても阮藉の詠懷を效ったかと思われる詠懷十五首をのせているのなど、大体において古風に力を入れているあとがうかがえる。

韻文の作には、詩の集社の唱酬の作が多数に見られる。その中に南郭が本多猗蘭侯の邸宅その他において作ったものが多い。南郭との交遊のあとをたどるには、これらの唱酬の作をとりだして観賞するのがもっともよい。このほか、徂徠や東野や金華など謾門の人々との唱和の作は相当にあり、その間の消息を知ることができる。文章では、猗蘭侯のために草した文章に重要なものが多く、詩文集の序跋や寿序および墓誌、碑文のたぐいは、猗蘭侯を知るための必須の資料となるものばかりである。以下これらについて、それぞれ章を分けて述べることにする。猗蘭侯の研究資料として重要なものばかりであるから、なるべく原文と訓読を掲げた。訓読には文集にもとから施されている訓点なるべくそのまま採用するようにとめた。難解な字句には僅かではあるが部分的に文意を注記した。

今回の調査で、品川東海寺を訪れ、本坊で南郭先生の墓の所在を聞いたが、住職不在で全く要領を得ず、漸く、服部元義氏に問いただして探し出して、東海寺の墓地（少林院の墓地という、ここに沢庵和尚の墓もあるので嘗て参詣したことがある）に南郭の墓を見出し、参詣することができた。墓の位置は墓地の中心からはずれたところにあった。あとで後裔の服部元義氏の談によると、この墓は東海道線の付設のため二回にわたり移転しているという。墓は正面に「南郭先生墓」と隸書体で大きく書かれているだけで、記録では墓誌（松平頼順撰）が内蔵されているというが未詳である。向って右隣りに夫人の墓がある。なお、南郭の墓からやや離れた墓域に、南郭の子の惟良、惟恭、元雄（仲英）その他、服部氏の墓が林立している。服部家には、先代の服部元文氏の整理された同家の墓誌録がある。その中に服部温卿（名惟良、南郭の子、寛延元

年三月没)の墓銘は烏石葛辰書とあり、又服部愿卿(名惟恭、南郭の子、元文五年没)の墓誌に友人源君岳書とあり松下烏石(葛辰)の署名のあるものがあり、烏石が服部家の墓誌を書丹している例があることがこの資料にてわかる。これもあまり世に知られていないから付記しておく。

服部南郭の伝記については、日野龍夫氏の服部南郭伝攷(女子大文学、国文篇二十一、二十三、二十五号掲載)、渡辺刀水氏の本多倚蘭侯(東洋文化一三三、一三七)、その他に負う所が多かったことを付記する。

南郭先生文集中における唱酬の作

西台侯別筵。分賦十二体。得五言古。侯帥戊酉京。初編一13。

門有車馬客。中堂陳庶羞。云是滕公子。祇役之西周。此君有令名。夙已光列侯。忽命拜虎牙。桓桓秉戈矛。四牡佶且閑。五
粲飾梁輶。良家出將種。偏裨總貔貅。發軔軫東海道。連翩入帝州。帝州多佳麗。城闌棲貴游。山川何鬱鬱。卉木嘉且稠。歡宴
宜樂土。酒杯日交酬。至治今止戈。講武礼所修。美哉茲文德。詩書更相求。烝徒喜安処。客子非有憂。四海已無虞。奇功焉足
収。輸力在守職。以答国家休。

西代侯であった本多忠統が、享保六年(一七二一)京都の警衛の任に赴くとき、江戸の邸において送別の筵が催され、十二の詩体をそれぞれ分担して作るとき、南郭には五言古詩の体が当たったので、その体をもちいてつくった詩。おそらく、徂徠をはじめとする護園の人々が主となって十二人が会合し、十二の詩の体を各自が分担するようになっていたのであろう。徂徠集卷一に、倚蘭侯將戌洛陽城、臨
發置酒、分十二体とあるのも同時の作である。

九月六日倚蘭台集 初編三7B

登高期已近。九月宴城隅。詩自唐諸體。人皆漢大夫。和歌慙郢曲。謠吹愧齊竿。猶著秋風帽。傲然混酒徒。

倚蘭台は本多倚蘭侯の邸宅(上屋敷は神田橋にあった)で、そこで詩の集会が催されたときの作で、九月九日の登高の節句がまもなくやってくる九月六日の作である。この日は高い山に登り、菊酒をくみ厄を払う習慣がある。郢曲は楚の郢地方の曲のことで俗曲をいう。ここは、宋玉が楚王の間に答えたことばに、客に郢中において歌うものがあり、国中の人々がそれに唱和するものが数十人あったという

本多猗蘭侯と服部南郭

故事をふまえて、今、席上で唱和の詩をつくるが、むかしの郢中において唱和したのにも及ばぬことを恥づる意。濫吹の句は濫竿らんぱんの故事、齊の宣王のときみだりに竿を吹くものがあり、南郭処士がその場を逃れ去った故事で、才のないのに任につくことをはずる意。ここは詩がつくれないことを恥づる意、秋風帽は、晋の孟嘉が、九月九日、風に吹かれて帽子を落した故事、ここは九月節句の宴席で、詩のつくれないまま、帽子を風に吹かれそうにして、かぶつまま、傲然として酒のみの仲間入りをしている意。酒徒は高陽酒徒の酒徒。

西台侯別筵。分賦三十二体。得三六言律韻文字。侯帥三戌西京。初編三13 A

離筵歌舞陪レ酒。征路江山入レ文。分衛帝王故邑。按レ衆龍武新軍。千人西戌車騎。五馬東方使君。行処還將三赤芾。到時更映三青雲。

前首とおなじく、本多猗蘭侯が享保六年（一七二一）京都の警衛の任に赴くときの送別の宴で、参会者にそれぞれ十二体の詩を分配したとき、南郭には六言律詩の体が当たったので、その体で作った詩。南郭は前出のとおり五言古詩をつくり、また六言律詩を作ったことになる。

猗蘭膝侯西台八景分賦伊駒白雲 初編四2 B

峻嶒雲滿伊駒傍。太守登臨爽氣長。南海陰晴從三變態。西台日月送三餘光。山寒似レ掩三秦皇牒。秋色還搖漢武章。詞賦応レ堪レ淹三五馬。風流憶昔在中郎。

正徳元年（一七一）（六月二十七日江戸発駕）、猗蘭侯は西代の封地に赴くが、この詩は、侯がこの西代に在って、この地に八景を定めた。その八景の一つについて同人たちが詩を作った。南部にはその伊駒白雲が当たったので作ったのがこの詩。後四句はみな故事を用いている。古文辞派の特色をなし、徂徠の詩ともよく似ている。漢武章は漢武帝の秋風辞、秋風起兮白雲飛にはじまる詩をいう。

夏六月西台侯將レ之三封河内三過三飲護園三同三諸子三賦二首 初編四7 A

君侯千騎出三城東。告別玄亭復過レ雄。韋帶相忘諸子坐。瓊筵為引大王風。不レ嫌三聚水非三凌室。但許芙蓉似三雪宮。還喜瘴天行欲レ尽。江山秋擁五花驄。

西台爽塏倚三嵯峨。氣色偏迎三大旆多。南国乾坤吞三夢沢。五畿郡邑轉三星河。群賢誰始黃金舍。千騎共從白玉珂。猶謂出遊思レ土切。停車好聽三甯生歌。

正徳元年夏六月（一七一）（二十七日江戸発駕）西台侯すなわち本多猗蘭侯が封地の河内の西代に赴かんとして、江戸の牛込にあった祖徠の護園に立ちよって、諸子とともに作った詩。おそらく同門の東野なども同席していたであろう。五花驄は五馬をいい、大名の儀仗が五馬の式であることをいう。中国では太守を五馬という。甯生歌は甯戚の飯牛歌の故事。

護園奉陪猗蘭侯 初編四 8 B

子子于旄北闕来。光輝忽傍野亭開。城西星動群賢座。河朔寒生五月杯。為見鄭衣臨子館。更知趙璧照侯台。曾思詞賦應劉富。蔚矣誰如鄴下才。

荻生徂徠の護園を猗蘭侯が訪問されて、詩酒の会合をしたとき、南郭もそれに陪席したときの作。「子子たる（そばだつこと）于旄、北闕より来る、光輝、忽ち野亭に傍うて開く」という、侯が儀仗をととのえて護園に来ると、にわかに野亭（徂徠の住居）に光輝がさしたようにはなやいだことをうたっている。趙璧は趙氏の璧、和氏璧のこと、古宝玉。応劉は、漢末の建安の七子の応瑒、劉楨をいう、この七子は鄴（河南臨漳県）に住んでいたので鄴下七子ともいう。古文辞派では建安七子の文学が理想であった。

冬日登樓猗蘭台同賦 初編四 11 A

談天諸子此相同。稷下風流碣石宮。秋後還蒸江海氣。雨前忽散夕陽中。西山雪動高樓掛。北闕雲當甲第通。臨眺曾憐搖落賦。那知玉模軫青葱。

冬の日、本多猗蘭侯の邸にて高樓に登って同人たちが詩の会合を催したときの作。談天は、談論風発、自由に語りあうこと。多分、護園門下の人々が集ったのであろう。稷下は山東臨淄県、昔、齊宣王が学者を優遇したので天下の学者がここに集まったところ。護園門下の人々の集りにたとえる。碣石宮は、燕昭王が鄒衍を住ませた館の名、幽州薊県西にある。揺落賦は、楚辞の九弁に「悲哉秋之為氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰」ではじまる賦。宋玉悲秋賦のこと、また魏文帝の燕歌行にも「秋風蕭瑟天氣涼、草木搖落露為霜」云々の詩がある。会合したのは秋後とあるから、初冬のころであろう。

猗蘭台集同諸子賦得幽字 初編四 11 B

東方争起使君樓。中有猗蘭居上頭。玉露夜分僊掌落。彩雲春對鳳城浮。援毫愧乏彫龍技。飛蓋叨從續虎遊。更使酒杯忘貴介。

本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

琴書何減竹林幽。

本多猗蘭侯の邸で謾園の諸子とともに詩を作ったとき、分韻して幽の字を得て作った詩。「東方争い起す使君の楼、中に猗蘭あり上頭に居る」といっているのは、当時、江戸において大名たちの邸宅があらそって建てられていたが、その中で、猗蘭侯の邸台は第一であったという。会合の盛大さを物語っている。雕龍の技は文章の巧妙なわざをいう。繡虎も文章の綺麗なことを意味する。曹子建が七歩あるく間に詩をつくったので、その才を称して繡虎と言った。竹林幽は竹林七賢の遊びをいうであろう。

猗蘭台雨集得雲字 初編五 9 B

高筵秋色雨紛紛。琥珀杯寒不厭醺。已識蘭台人似玉。転看珠履客如雲。

雨のふる日、本多猗蘭侯の邸で集会し、分韻して雲の字があたったので、この韻を用いて作った詩。珠履客は、昔、春申君が珠で飾った履をはいた上流の客が三千人集った故事。雲の如しは、人多きこと雲の如しの意で、この詩会には多くの人々が参加していたことが想像される。

陪西台侯遊驪山同賦得飛字 初編五 10 A

五馬春風花欲飛。驪山二月闌芳菲。假令十日須酣飲。未必交歡問布衣。

南郭が西台侯すなわち本多猗蘭侯のお伴をして驪山へ遊びに行ったとき、ともに詩をつくり、分韻して飛字を得てつくった詩。驪山は地名箋にメグロとしている。地名は多く中国風に改めて使用している。驪山の山下のあたりに侯の別邸があった。

逍遙公子宴奉陪猗蘭侯得疎字 二編三 11 B

公子逍遙館。潭潭大府居。蘭台移宴樂。玉模映階除。坐久人全醉。杯行酒不疎。酣歌未歸去。為有馮驩魚。

逍遙公子の宴会に招かれて、猗蘭侯の相伴をして陪席したとき、分韻して疎の字を得て作った詩。逍遙公子は猗蘭侯と交遊のあった大名の一人であろうが、未考。「潭々たる大府の居」とあり奥深い広大な大名屋敷である。唐の韓愈の詩句に、「潭々府中居」の句がある。

「蘭台宴樂を移す」とあるのは、猗蘭侯の屋敷で行うのをこの逍遙公子の屋敷へ会場を移して行われたことをいう。馮驩は戦国の斉の孟嘗君の食客で、一剣を有するのみで、食物に魚がないと言ったので、孟嘗君が中等の客舎に移して魚のついた食事を与えたという故事。

ここは公子の屋敷に移って御馳走の出たことをいう。

乙卯之冬。猗蘭侯莊五松館側生靈芝。賦此奉賀 二編三16 A

郊垌廻鳳藪。谿壑蓄龍淵。此處生神草。由來異瑞煙。和蒸三秀色。氣接五松前。倚樹宜承露。臨巖似挹泉。晨昏紫沢潤。咫尺彩雲懸。何必銅池上。不須玄圃田。休祥王者化。贊育我公賢。庶績方無事。豐穰已有年。退朝移革履。之館展瓊筵。堪養茹芝老。非求避穀僊。頌聲歌誦入。賀客酒杯伝。共醉清風徳。還羞穆若篇。

乙卯の冬、享保二十年（一七三五）の冬に、本多猗蘭侯の別荘の五松館の側に靈芝が生じたので、この詩をつくって奉賀した作。靈芝は稀に生ずるので瑞兆として賀詩を奉ったのである。穆若篇は詩經大雅烝民篇の「穆如清風」をいう。美徳を讃えるに用いることば。この年のころは侯は若年寄であつた。

呈参政西台滕公二首 二編四11 A

西台入領漢司空。共識聖朝賢路通。四海文章誰建策。百年礼樂待成功。明堂五等班侯伯。開府三台副相公。袞職從來供補闕。頌歌期与仲山同。

廟堂才器属文明。千載風雲自盛名。列国王官周鄭武。大臣経術漢玄成。紫宮宜見緇衣色。黄閣堪聞革履声。誰料退朝勞吐握。更開杯酒接鰾生。

参政西台滕台に呈する二首とあり、参政は若年寄りの官にあつたことをいう。享保十年（一七二五）以後、寛延三年（一七五〇）まで、前後二十六年この官にある。「西台より入りて領す漢の司空、共に識る聖朝賢路の通ずるを」云々とあり、若年寄の重職についたことを述べている。多分任官のはじめのころの作であろう。「四海の文章、誰か策を建つ、百年の礼樂、成功を待つ、明堂の五等、侯伯に班し、開府三台、相公に副う。袞職、從來補闕に供す、頌歌、期すらくは仲山と同じからんことを」とあり、侯の政治家として文章をもって策を建て、礼樂によって治世の基本とする人物の像をよく描き、その功績が、周の宣王を補佐して中興の業を成しとげた仲山甫と同じであることを期待している。末尾の鰾生は小魚の意、自分を卑下して、私にもともに酒をくみかわして接してくれることを感謝している。

滕侯南莊五松館 二編四3 A

本多猗蘭侯と服部南郭

本多倚蘭侯と服部南郭

侯家別業古松林。風韻兼聽台上琴。僊鼎脂經三千歲一落。龍鱗影動五株一深。棟梁已入丁公夢。丘壑猶存謝傳心。看駐山中霜後色。時迎劍寫一更陰。

本多倚蘭侯の別荘の五松館において作った詩。詩の集会の席上で作ったものであろう。この別荘は、この詩を収めた南郭文集二編が元文二年の刊行であるから、それまでの時期にあったもので、のちの高輪の下屋敷ではない。芝の白金にあったという。倚蘭侯に銀台別業記（倚蘭台集二稿卷四）があり、城を去ること十里、海を去ること三里、驪山その西に扼るとあり、享保十二年ごろには成っていたという。（渡辺刀水氏、本多倚蘭侯）。

西台侯南莊得長字 二編五6A

野色林煙帶夕陽。山中宰相自輝光。五松館外松千樹。都聽清風滿苑長。

前首とおなじく五松館のある南莊において作った詩。分韻して長字を得たとあるから、同人ともに集会したときの作であらう。

奉和倚蘭侯席上見贈作二首 二編五23A

北闕青雲日日新。西山白雪自無塵。他時更望芙蓉色。元屬蓮花府裡人。

坐忘亭上醉相酬。不羨君卿遊五侯。玉樹銀台明月夜。清風只在關西頭。

本多倚蘭侯から席上で贈られた詩に唱和して、南郭が作った詩。この中に、坐忘亭の名が見える。この亭はもと江戸の藩邸に作られたもので、現在、鈴鹿市神戸石橋町、龍光禅寺に再建されて保存されている。これが坐忘亭の遺構であると伝えられている（鈴鹿市史二参照）。

停雲館集分体 三編一4B

侯家公子館。園後共燕嬉。座客何多才。歡笑相追隨。詩賦与絃管。高歌寄妙詞。金樽玉盤饌。杯行亦不遲。青松列庭樹。朱実間離離。對景知歲寒。復感日月移。蟋蟀刺過俟。娛樂貴及時。況茲良宴会。千秋以為期。

侯家公子館とあり、標題の停雲館はやはり倚蘭侯のどこかの邸内にあったものと思われる。ここではしばしば詩の集会が行われたよううで、この詩もその一つで、分体とあるから五言古詩の体が当たったので、この体で作った詩である。詩をつくり音楽を演奏し歌唱してい

る情況がよくわかる。建安七子の作風をよく倣った詩である。

停雲館歌奉贈滕公子 三編一 8 B

城西邸第接_レ霄漢_一。中有_二風流公子館_一。館中公子富_二文雅_一。不_レ事_二鬪鷄兼_二走馬_一。七步賦_レ詩臨淄侯。三調吹_レ笛桓子野。絃管文章日会_レ友。詩成交涌如_レ泉酒。酒酣一曲公子吹。律呂密櫛奮_二繁手_一。已聞五月落梅花。更奏四時折楊柳。声声上干_二咫尺天_一。坐客相看皆矯_レ首。丹鳳城頭五色分。慶雲帶_レ日且紛紛。有_レ客称_レ觴向_二公子_一。請号_二此館_一曰_二停雲_一。更申将来千秋祝。長遏_二青雲_一倚_二氤氲_一。

猗蘭侯の江戸の藩邸のほかに、別荘があったようで、ここに城西邸第というのもそれであろう。晩年、高輪の海岸のほとりに邸宅ができるが、これは南郭文集三編に収めているので、延享二年までの作であり、高輪の別邸ではない。停雲館というのも、侯の邸内にあったものであるが、友を会して、詩文をつくり酒をくみ、音楽をたのしむ館であり、この詩は、その歡樂をよく描いている。「酒酣一曲公子吹く。律呂密櫛として繁手を奪う、已に聞く五月落梅花、更に奏す四時折楊柳、声々上干す咫尺の天、坐客相看着皆首を矯ぐ、」とあり、侯が笙か笛のような管楽器を演奏して、楽府の落梅花とか、折楊柳という楽曲を歌っている光景が述べられている。楽器を用いて唐楽を演奏して楽府などを歌っていることが、これでさらに明らかになる。

坐忘亭夏集得寒字 三編二 3 B

晚日開_二園後_一。池亭暑色闌。波侵_二湘簾淨_一。風引_二楚台寒_一。體凍凝_二銀椀_一。膾絲鮮_二玉盤_一。坐忘名自有。堪_レ接_二布衣歛_一。

猗蘭侯の江戸の藩邸内にあった坐忘亭で、夏の日に集会を催し、分韻して寒の字を得て作った詩。坐忘亭のことは先にも詩があったが、本多猗蘭侯の集にも、坐忘亭晚涼、(二稿卷一)、坐忘亭夏集得青字(二稿卷二)、坐忘亭小集時花燭爛(二稿卷二)、雨飲坐忘亭得青字(二稿卷三)があり、この中の夏集はこの詩と同時の作であろう。

坐忘亭は、前注にものべたが、享保六年(一七二一)江戸の藩邸に築かれたものである。現在鈴鹿市神戸龍光寺に再建されている。昨年夏、研究所の調査によって神戸の坐忘亭を訪れることができた。猗蘭侯には坐忘亭記があり、原文が猗蘭台集初稿卷五に掲げられている。政治家というものは平生から生活のゆとりをもって、目を遊ばせ心を娯しませる安静な時をもってこそよい政治が成しとげられるという趣旨からこの苑を開いて庭園をつくり、園中の亭に莊子の言葉をとって坐忘と名づけたことを説いている。

本多猗蘭侯と服部南郭

九月一日成章公子集猗蘭侯臨宴 三編二4 B

侯家臨_ニ館宴_一。公子授_ニ餐遊_一。章自成_ニ詞賦_一。坐堪_レ充_ニ膳羞_一。漸催_ニ黃菊節_一。仍惹_ニ桂花秋_一。誰念陪_ニ酣醉_一。帽風吹_ニ白頭_一。

江戸の藩邸には、成章館を設けて、子弟の教学にあてた。成章公子は成章館に学ぶ子弟をいうであろう。この日、館の宴集に猗蘭侯が出席された。この席に南郭も加わってこの詩を作ったのであろう。

猗蘭台適室飲 三編二5 A

新促_ニ高堂坐_一。聊開_ニ小戸通_一。天寒宜_レ卜_ニ夜_一。松近可_レ聽_ニ風_一。樽酒三盃後。芝蘭一室中。不_レ妨吟擁_ニ鼻_一。醉与_ニ謝公_一同。

本多猗蘭侯の邸内に設けられた小室で酒を飲んだときの作。猗蘭台集三稿巻四に適室の記があり、方丈の小室を説いている。

穀日登_ニ猗蘭台_一得_ニ霞字_一 三編二5 B

高台人日後。登望転無_レ涯。官柳帰_ニ春色_一。城雲靄_ニ暮霞_一。流鶯百轉近。回鴈数行斜。処処年芳速。堪_レ辞_ニ勝裡花_一。

穀日は吉日のこと。吉日に本多猗蘭侯の邸において集会が催され、分韻して霞の字を得てつくった詩。高台人日後とあるから、正月七日ののちのことである。

歳暮飲_ニ膝侯松翁_一得_ニ家字_一 三編二9 B

即見_ニ朝陽映_一。安知_ニ暮景斜_一。斎高隣_ニ鳳閣_一。松古似_ニ仙家_一。無_レ悉終年酒。復期_ニ来歳花_一。憐吾霜鬢白。尚伴_ニ鶴齡遐_一。

膝侯とあるのは猗蘭侯であろう。歳暮の詩会で、猗蘭侯の松翁、あるいは五松館というのもあり、松の木が多かった庭園がよく詩に出てくる。これも集会して分韻し、家の字があたったのでこの韻で作った詩。

陪_ニ飲猗蘭台新成書堂_一得_ニ如字_一 三編二12 A

堂皇連_ニ後苑_一。樹石静_ニ前除_一。風韻琴相似。泉鳴玉不_レ如。新開百壺酒。更徙五車書。道術相忘久。寧論_ニ濠上魚_一。

本多猗蘭侯の邸宅に新しく書斎が建築されたときの披露の宴に陪席したとき、分韻して如の字を得てつくった詩。猗蘭台集初稿巻五に書堂記がある。書堂に関してはその設置の趣旨のあるところは、この文章にて解る。五車書は蔵書を意味することば。末二句は道家の本はおたがい久しく忘れて読まないが、書堂が成ったのでまた莊子でもよんで、濠上の魚が楽しみを知っているかどうか論ずるのを聞い

て見たいという意であろう。

飲_ニ猗蘭台_一 三編二12 B

入_レ室元同臭。登_レ台更似_ニ蘭_一。坐高宜_ニ避暑_一。饌盛喜_ニ陪飲_一。況已如_レ澗酒。可_レ須_ニ承露盤_一。誰知城闕外。此処醉中看。

本多猗蘭侯の邸宅にて酒を飲んだときの作。侯はとくに酒を愛し、よく大酔したという。

陪_ニ猗蘭侯于銀台山莊_一得_ニ林字_一 三編二16 A

地主為_ニ幽襟_一。到来丘壑深。銀台遥增_ニ色_一。琪樹別成_ニ林_一。行_レ酒花侵_ニ眼_一。彈_ニ琴鳥会_ニ心_一。当今謝太傅。不_レ待_ニ遠登臨_一。

銀台山莊において本多猗蘭侯に陪席し、分韻して林の字を得て作った詩。銀台山莊は、別出の銀台別業であろう。謝太傅は晋の謝安、風流宰相として名高い人物。猗蘭侯によくたとえられる。

参政滕公府詠小池芙蓉得_ニ四支_一 三編二20 A

咫尺憑_ニ欄処_一。芙蓉出_ニ水時_一。已含_ニ仙掌露_一。疑植_ニ鳳凰池_一。相府生_ニ花近_一。雲台棒_ニ日移_一。洗頭供_ニ玉女_一。過歩妬_ニ瑤姬_一。衣整紅全艷。珠明翠未_レ衰。誰爭初發色。自有_ニ謝公詩_一。

参政滕侯とあるから、若年寄りの猗蘭侯の藩邸で行われた詩会である。小池芙蓉は庭園の小池に蓮の花がさいているのを題材として歌った詩であり、分韻して支の字が当たったのでこの韻で作っている。謝公というのはたいいて晋の風流宰相とよばれた謝安をいい、これを猗蘭侯に見たてている。

蘭台醉帰明日奉_ニ贈_ニ参政滕公_一 三編三2 B

城頭帰興帶_ニ輝光_一。白虎門南月似_ニ霜_一。三日難_ニ醒僕射酒_一。于今猶惹令公香。衛詩彩筆成_ニ圭璧_一。燕駿高台有_ニ驪驪_一。且想衣冠時不_レ怠。軒軒早已出_ニ朝堂_一。

本多猗蘭侯の邸宅で酒に酔っておそくに帰り、あくる日、参政（若年寄）の滕公（猗蘭侯）に贈呈した詩。白虎門は虎の門をいう。歳暮雪後集_ニ猗蘭台_一得_ニ人字_一 三編二17 B

蘭台自高潔。雪後更無_ニ塵_一。瓊席闌干近。瑤花草木新。眼前遭_ニ惜歳_一。酒裏預憐_ニ春_一。好映_ニ酡顔客_一。相忘白髮人。

本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

年の暮れ、雪のふったあと、本多猗蘭侯の邸宅で集会をして、分韻して人の字を得てつくった詩。

膝公桂花楼成席上得山字 三編三6 A

従容府第自_レ公還。更上_三新楼_二吏事閑。為_レ引_三三秋明月色_一。且開双闕彩雲間。愛_レ香荀令臨_三中座_一。裁_レ桂淮南擁_三小山_一。八子群才詞賦滿。誰憐招隱得_三躋攀_一。

膝公桂花楼成るとあり、桂花楼は猗蘭侯の在職中、保養のために設けられたものである。その新築の席上で詩盟の同人たちが詩をつくり、南郭は山の字が当たったのでこの韻で作った詩。愛香荀令は、後漢の荀彧が人の家に至ると、その坐処に三日も余香が漂うたという。集会の同人の一人にこのようなのがいたという。あるいは猗蘭侯をさしているのかもしれない。裁桂淮南は、漢の淮南王安が仙を求めて遍く方士を礼し、八公と携えて何処かへ行ってしまった。家臣の小山の徒が淮南王を思恋してやまなかったという、故事であろう。桂は月中の桂の意、求仙のことであろう。八子とあるのは、猗蘭侯をとりまく謏園の同人が八人集ったこと。普通は七子というが、この日は八人集合したのでかくいったのであろう。招隱は淮南王安が俊偉の士を招いたので、八公の徒がこの徳を慕うて集った故事。八人の出席者の中、誰がこの仙境に到ることができようかという意であろう。桂花楼の詩はこのほかにも九首ある。左に列記する。本文はしばらく省略する。

中秋桂花楼飲今夜未卜陰晴。 三編一6 A (猗蘭台集三稿一15 Aに同題あり)

桂花楼翫月得棲字 三編二4 A (猗蘭台集二稿二26 Bに同題あり)

桂花楼雪後得春字 三編二7 A

夏日桂花楼飲得泉字 三編二14 A (猗蘭台集三稿二14 Aに同題あり)

桂花楼中秋新晴得清字 三編二16 B

夏雨集桂花楼得秋字 三編二18 A

桂花楼賞月得秋字 三編三6 A (猗蘭台集三稿一3 Aに同題あり)

桂花楼奉觀逍遙公子寄題之作。 三編四11 A

桂花樓望初月

三編四11B

猗蘭台集三稿卷五に桂花樓記があり、「余さきに東都公衙橋邸（神田橋に上屋敷があった）に移り、ここに居ること十五年、偶たまま病む。医曰く、侯の職に在ること已に十五年、執事（若年寄）の勞、積みて以って病となる。願わくは侯、能く無窮の門に入り、無極の野に遊ばは、精神を傷わず。藥石なしと雖も其れ安からん」という。そこで保養の地をえらんで、南は大海に面して、東は月の出の眺められる風光のよいところに設けられた樓がこれである。のち、延享二年（一七四五）春に、その樓の付近の松林を伐りひらいて西南に富嶽を眺望できるようにしたので、そこでまた桂華樓再記をかいている。（猗蘭台集卷五16A）。その記事の中に、予、茲に居ること二十二年と言っているから、延享二年からさかのぼって寺社奉行になった享保九年（一七二四）のころからここにいることになる。桂花樓のことはこの両記ではば明らかにする。しかし、延享二年のころには、護國の才子たちはたいいてい逝去して、ただ上座に客と為すものは、ひとり服部南郭だけであつたと記している。南郭が最後まで侯のよき友であつたことがこの記事にてわかる。猗蘭台集にも桂花樓の詩が多い。

逍遙館席上分得一東^一奉^レ贈^二膝公子雲夢先生^一 三編三八A

朱門白日海雲東。客至逍遙別館通。阿閣已棲孤鳳彩。南溟且伴大鵬雄。信陵公子元虛^レ左。鄭圃真人好御^レ風。附翼廻翔良宴会。老生羞殺鬢如蓬。

逍遙館は逍遙公子の館であろう。その詩会の席上で分韻して一東の韻を得て詩をつくり、膝公子（猗蘭侯）および越智雲夢（名は正珪、字は君瑞、号は雲夢。徂徠門）に贈ったもの。この席には多くの参加者があつたようで、それを賢士や神仙の集りにたとえている。信陵公子は戦国の魏昭王の少子信陵君のこと、賢士を招いて、上席をあけて（虚左）これを迎えたという。鄭圃真人は列子をいう。列子御風の故事。このような盛大な宴会で、南郭自身は老衰して仲間入りしているのを恥ずるという意。猗蘭台集二稿四に逍遙館燕稿序がある。

停雲館春讌奉^レ陪^二猗蘭侯^一得^二衣字^一 三編三八B

邸台城闕共^二春輝^一。停^二得青雲^一傍^二紫微^一。公子趨庭兼^二彩服^一。君侯臨^レ館映^二緇衣^一。新花有^レ待迎^レ人發。啼鳥如^レ呼勸^レ酒飛。且喜風光隨^二日永^一。追陪歎極未^レ催^レ歸。

本多猗蘭侯の停雲館において、春の宴集があり、その席において猗蘭侯に陪して、分韻して衣の字を得て作った詩。大名たちが集った本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

豪華な宴会のさまが描かれている。猗蘭台集三稿に停雲館春讌席上贈子遷得林字の詩があるのが同時の作であろう。

奉_レ訪_ニ成章公子於南莊_一 三編三9 B

棲_ニ遲郊外_一度_ニ芳年_一。誰識中山公子賢。空谷白駒甘_レ遠_レ跡。青雲魏闕懶_レ朝天。庭階且借栽_レ蘭地。歲月堪_レ培種_レ玉田。幽興唯餘_ニ詩酒客_一。論_ニ心江海_一得_ニ相憐_一。

本多侯の藩邸にあった成章館の公子（ここは猗蘭侯をいうか）を南莊（五松館のあるところ前の詩に見える）に訪ねたときの詩。庭階しばし且く借る蘭を栽するの地というのも猗蘭侯のことを言っているであろう。

参政滕公寿筵 三編三10 B

滿堂佳氣坐氤氲。更進_ニ瓊觴_一酒自醺。詞賦珪璋誰得_レ似。子孫麟鳳此成_レ群。初筵已厭南山色。甲第愈高北闕雲。稍見上台連_ニ斗極_一。寿祥非_ニ独映_ニ星文_一

滕公寿筵とあり、南郭集三編に収めているから猗蘭侯の多分五十歳の寿筵のときの作であろう。参政は若年寄をいう。

中秋蘭台集得中字 三編四5 A

蘭台夜色自雄風。霄漢秋高落_ニ月中_一。似_レ聽_ニ霓裳天上奏_一。人間近接_ニ寒宮_一。

中秋の八月十五夜、猗蘭侯の邸宅での集会で、分韻して中の字を得て作った詩。

又得_ニ家字_一奉_レ和_ニ猗蘭侯_一席上作 三編四5 A

処処秋風桂樹花。争開樽酒萬人家。随侯別有_ニ明珠色_一。添_ニ得天光_一映_ニ月華_一。

また、分韻して家の字を得て、猗蘭侯に陪席した席上で奉和した作である。おそらく前首と同時の作であろう。

花亭新晴奉和猗蘭侯席上見贈 三編四6 B

花亭対_レ酒賞_レ花還。纔遇_ニ新晴_一心自閑。又恐人間明日事。無辺風雨暗_ニ春山_一。

雨の晴れた日の花見の席で、本多猗蘭侯から詩を贈られて、それに唱和した作。猗蘭台集三稿巻一に、対花、看花の作が数首ある。あるいは同じころの作であろう。南郭の作は詩人としての情感のあふれた佳作である。

蘭台醉歌贈佐記室 三編四 8 A

蘭台自有習家池。騎馬何須倒接羅。醉後風流誰得似。山公咲問并州児。

本多猗蘭侯の邸宅の宴集で、酒に酔うて歌唱し、同席した佐記室に贈った詩。佐記室は侯の身边にあり、詩文などの記録をする侍史の人であろう。南郭文集初編九11に与佐元錫の書牘があり、西台侯に従っていたことを記すから、あるいはこの人であろう。習家池は、晋の山簡の故事、山簡は池の辺で酒を飲み、その池を高陽池と云った。一にこれを習家池とよぶ。酒に酔うと白い頭巾、（接羅は頭巾の意）を倒にかぶったという。山公は山簡のこと、并州の児に問うも、山簡の故事の中に并州の児が出てくる。

坐忘亭待月 三編四 8 A

秋色亭高入醉歌。回頭天際白雲過。不勝窈窕思明月。吹送清風先已多。

坐忘亭のことは、前にも見える。猗蘭台集二稿卷二に坐忘亭待月得清字詩がある。同時の作であろう。

春日陪飲猗蘭台 時間 逍遙公子来宴成章館 作此奉贈羣公子 三編四 9 A

玉樹春風並萼吹。成章館裡映金卮。忽聞不厭梅花發。又自江南添一枝。

春の日、本多猗蘭侯の宴に陪席したとき、逍遙公子が成章館の宴席に来たことを聞いて、この詩を作って、出席していた多くの公子たちに贈った詩。

成章館春讌得山字 席上上猗蘭侯 三編四 9 B

青樽坐映百花間。玉樹階庭醉後顏。内集團栞謝大傳。春來不用上東山。

又上成章公子

成章之館對春山。詞苑如花不可攀。為是蘇公工手筆。重看小許縱人間。

江戸の本多侯の藩邸にあった成章館において、春の宴集の席上、分韻して山の字を得て、猗蘭侯にたてまつった詩。謝太傳は晋の謝安、妓をたずさえて東山に遊んだ。風流宰相とよばれる。よく猗蘭侯に比べられる。蘇公は宋の蘇東坡であろう。猗蘭台集二稿卷三に、成章館春讌分韻春字今日子遷至因賦とあるのと同じの作。

本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

猗蘭侯席奉送勝山侯帰藩得花字 三編四16 A

風流晋代謝公家。出入争開玉樹花。更見分藩小侯氏。奉揚遥発画熊車。

本多猗蘭侯の宴席で、勝山侯の帰藩するのを送別する詩をつくった。分韻して花の字を得てつくっている。風流晋代謝公家は、晋代の貴族では謝家が名門で、謝安もその家の出身、風流宰相の称がある。画熊車は熊を画いた車、大名の儀仗。本多忠統の次男の信胤が勝山侯の嗣（養子）（越前勝山藩小笹原信成）と為っている。（猗蘭侯墓誌参照）。

歳暮蘭台値雪奉和滕侯得五微 三編四20 A

幾度蘭台尽醉帰。年闌况復此依依。興深不_ニ是山陰路_一。西出_ニ城門_一雪滿_レ衣。

年の暮れ、本多猗蘭侯の邸の宴集に陪り、帰るとき城門を出ると雪がふっていた。この集会で、分韻して得た五微の韻に合わせて猗蘭侯に奉った詩。

晩秋陪猗蘭侯飲此君亭 三編四22 A

此君亭上罄_ニ君飲_一。楓落秋風勸_レ酒寒。滿坐莫_レ非_ニ貪_レ醉客_一。不_レ須裁_レ竹避_レ人看。

晩秋のころ、猗蘭侯に陪席して此君亭において酒を飲んだときの詩。猗蘭台集三稿卷二に、晩秋此君亭飲席上贈子遷の詩があるのは、同時の作であろう。

奉_レ訪_ニ猗蘭老侯隱居_一 四編二8 B

紫極青雲指掌間。誰知辞_レ滿謝_ニ崇班_一。三朝日月懸_レ車穩。一壑煙霞卜_レ地閑。身退功名餘_ニ北闕_一。心遥江海繞_ニ南山_一。幽情不_レ老多_ニ行樂_一。長此春風入_ニ醉顏_一。

本多猗蘭侯は、寛延三年（一七五〇）若年寄を引退して、高輪屋敷に隠居する。この屋敷跡は、今回、研究所の一行とともに見学することができた。現在の高輪公園の東隣にあり、今は建築中の建物があるが、その地には、最近まで柴田鍊三郎氏の住居があり、侯の庭園の遺跡なども残っていたということであるが、今はそれも見る事ができなくなっている。品川の海岸に最も近いところで、古地図などでも明記されている。寛延三年（一七五〇）十二月、忠統侯は髪を下して法体となり、隠居して名を拙翁と改めた。このとき南郭にあて

英藁館聞書と服部文庫

英藁館聞書は、現在なお服部家に伝えられている写本で、六丁ばかりの小冊子である。筆者は明らかではないが、南郭の曾孫の服部元雅というのが書写したという説がある。(近世中期文学の研究、服部匡延氏著、服部南郭資料、昭和四十六年十二月刊)、この本は服部家の故実をよく伝えているので、南郭研究には欠くことのできない貴重な著書である。その末尾に服部南郭の蔵書のことを記した部分があり、漢籍の名を多く掲げている。これらの漢籍が南郭の蔵書の中にあつたことが考えられる。その中の十三経のところに「右の本は本多伊予侯取次にて御買ひ被下候。是は金子を此方よりいたし伊予侯に相頼申候て御かい被下候也」とあつて、漢籍を購入するのに南郭は本多忠統に依頼している。又、十七史の下にも、西台侯長崎より御取寄とあり、本多忠統が長崎からとりよせてこの本を南郭のために買っていることを記している。このようにして漢籍の名を列挙している。このあとに、通鑑、白文左伝(進物本)、世説(唐本)、荀子(進物本)、詩経説約、十二家詩選、新序、四書通解、詩経集註、戦国策、後漢書万曆本、源氏拔書、長崎商示条約、南史、呂氏春秋、林注老莊列(劉辰翁評本、唐本也)老子、文章軌範、三家詩話(以上皆南郭様御手入也)というように記されている。今日、南郭の所蔵していた当初の漢籍は明らかではないが、これによってその一部分を知ることができる。しかも、その中に本多忠統侯に依頼して買っている本があるということは注目される。侯が南郭から李攀龍の滄溟集を送寄された返信に書物虫の癖相止不申候とあり、書物好きであつたことがわかる(渡辺刀水氏論文)。

服部文庫は現在早稲田大学図書館に所蔵されている。当主の服部元義氏の先考元文氏が、鉱石の研究をされていて、早稲田大学において教授されていたところ、元文氏が家蔵の蔵書六千餘冊等(画幅を含む)を大学に寄贈されたものが、服部文庫として図書館に収蔵されている。内容は和漢の図書の各方面にわたっているが、南郭の時代のものとはほとんどなく、それ以後のものということである。本多侯の関係のものは、猗蘭子ぐらいが目につくだけで、今のところ未詳である。近日中に目録も成り、公開されるというので、なお猗蘭侯の関係資料もありうると思われるので、今後の研究に期待される。

服部文庫その他早稲田大学にある猗蘭侯関係の資料については、服部匡延氏から御紹介された司書の金子宏二氏の御教示を得たことに謝意を表する。

てそのことを記した和文の書簡がある。(渡辺刀水著本多倚蘭侯四、東洋文化一三六号)この詩は、猗蘭侯が高輪の別邸に隠居されたのを訪問して贈ったものである。

題喜寿公臨海樓 猗蘭侯隱処
名喜寿園 四編二九A

層樓初日破_レ溟烟_一。瀨氣朝開若木懸。簾捲_二龍躡_一疑_レ踏_レ浪。檻攀鵬際欲_レ垂_レ天。高樓已謝山中相。遥举常遊海上仙。不_二是華陽隱居小_一。十洲三島彩雲前。

喜寿公臨海樓に題すとあり、猗蘭侯の隱処を喜寿園と名づくところ。喜寿公は猗蘭侯のことであろう。喜寿とあるのは、今は七十七歳をいうが、ここは侯の年令は、隠居した年は六十三歳で、六十七歳で没しているから、今日のいう喜寿の意味ではない。この邸を喜寿園と名づけたことがこの詩で解る。別に、南郭集には報喜寿侯という書牘三通があり、侯の隠居してからちの交遊の情がつぶさに記されている。南郭とは晩年にいたるまでに親密であったかがよくわかる。

猗蘭台集三稿卷五に、喜寿苑記、喜寿山記、喜寿亭記、喜寿先生伝の三つの文章がある。喜寿苑の詳細はこれらの文によって知ることができる。喜寿苑は晩年高輪に隠居して、その邸に名づけたものであろう。白狐山の南にあるという。苑内の林泉は粹を尽した造営のようで、この文にその庭苑の美しさがよく画かれている。喜寿山はこの苑の中にある。地名箋ではウキスノモリと訓している。喜寿山のこと、喜寿亭のこといずれもこの文に詳しくその情景が描かれている。喜寿先生伝は、侯の自叙伝のつもりで作られたもので、晋の詩人で、隱逸の宗といわれた陶淵明の五柳先生伝に倣って作られている。先生、姓名を著わさずというのは、五柳先生伝に、先生は何処の人なるかを知らずと言って、無名の野人として記されているのと同じで、内容も五柳先生伝とよく似ている。ちょうど、水戸光圀公の寿蔵碑の文が、やはり五柳先生伝に倣っているとよく似ている。隱退後の高い心境を短文に美しくかきあらわし、その人格のすぐれたことは、この自叙伝ともいうべき一文によってうかがうことができる。

次に喜寿先生伝を訓読して揚げておく。

喜寿先生伝 三編五三A

喜寿山名也。先生不_レ著_二姓名_一。老而隱_二斯地_一。人因為_レ号焉。為人好_二閑関_一。避_二囂躁_一。性情病多。甚困_レ藥礼法_一。且苦_レ交_二塵俗_一。常嗜_レ本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

酒而樂_二山水_一。賦詩著_レ文。頗縱_二己志_一也。醉而兀然則高歌。醒則_レ恍爾則彈_レ琴也。或望_二山雲繞_二廻深林_一。或臨_二雪濤瀆_二瀑大江_一。或觀_二清泉宛_二潭澗流_一。游_レ目騁_レ懷也。艸廬去_レ都不_レ遠。鄉里賓客。有_レ時尋訪。乃則稱_レ病不_レ遇。如_レ此已數焉。客大怨曰。非礼人也。先生聞_レ之大喜。尚且若。是以隱。而未_二三歲_一。無_二敲門者_一。愈益寂然。琴酒之樂陶陶焉。春朝夏夕。情倦興尽。則曳_レ杖而步。稚子在_レ側。每_レ至_二園圃_一。相從而行。席_二長筵_一。而箕踞。携_二罇酒_一而斟酌。調戲歛笑。而採_レ果摘_レ菜。盈_レ筐而帰。斯是趣也。非_レ有_レ意。寧蘧道之有無。略似_二安仁所謂優遊以養_レ拙_一。

喜寿先生伝

喜寿は山の名なり。先生は姓名を著_あさず。老いて斯_この地に隠る。人、因つて号と為す。人となり閑閑_{かんげん}（しずけさ）を好み、驚躁_{ごうそう}（さわがしいこと）を避く。性情にして病多し。甚だ礼法に縻_{つな}がるるに困_{くる}む。且つ塵俗に交わるに苦しむ。常に酒を嗜_{たしな}み、山水を樂しみ、詩を賦_あし文を著_あわし、頗_{すこ}る己の志を縱_はにす。酔うて兀然_{こつぜん}たれば、則ち高歌す。醒めて恍爾たれば、則ち琴を彈ず。或は山雲の深林を繞廻するを望み、或は雪濤の大江に瀆瀑するに臨み、或は清泉の、澗流に宛潭するを觀る。目を遊ばせ懷いを騁_はするなり。艸廬、都を去るのと遠からず、郷里_{ひんきやう}の賓客、時ありて尋訪すれば、乃ち則ち病と稱して遇わず。此の如きこと已_{すで}に數_{しばしば}す。客、大いに怨みて曰く、非礼の人なりと。先生、之を聞きて大いに喜び、尚お且つ自若_{じじやく}たり。是を以つて隠る。未だ三歳ならずして、門を敲くものなし。いよいよ益々寂然たり。琴酒の樂、陶陶焉たり。春の朝、夏の夕、情倦_{ゆうべ}み興尽くれば、則ち杖を曳_ひいて歩む。稚子_{ちし}、側_{かたわ}にあり、園圃に至るごとに、相從つて行く。長筵_{ちやうぜん}（むしろ）を席_しきて、箕踞_{ききよ}（あくぐらをか）くす。罇酒を携えて斟酌し、澗戲_{たむけ}歛笑す。而して果を採り菜を摘み、筐_{かど}に盈_みして帰る。斯_{すな}ち是の趣や、意あるに非ず。寧蘧_{いづくんぞ}（寧渠に同じ、いづくんぞの意）道の有無_はに在らんや。略_は、安仁（六朝の詩人、潘岳、字は安仁）のいわゆる優遊以つて拙を養うに似たり（潘岳の閑居賦のことば）。

奉_レ和_二喜寿侯中秋対月見懷之作_一 四編三12 B

相憶当年百感生。桂花秋至不_レ勝情。但知滄海樓頭月。不_レ減青雲城上明。

喜寿侯すなわち猗蘭侯が、中秋、月に対して南郭を懷うた詩に唱和して、侯に奉った作である。桂花、秋至つて情に勝えずというのは、かつて桂花楼においてしばしば会合した想い出をかけていう。猗蘭台集三稿卷三の、仲秋対月懷子遷の詩と同時の作であろう。

奉寄懷神戸嗣侯 四編三19 A

賦_レ月高樓彼一時。繁陰重想桂花枝。誰憐十載西園客。回_三首秋風鬢似_レ絲。

神戸嗣侯を懷うとあるから、忠統侯の後嗣忠永に寄せたものであろう。本多家関係の詩としては最後に出てくるものである。長徳公祠堂碑によると、宝永七年夏六月、嗣侯が神戸城に還るとき、南郭に会っている。あるいはこのころの作であろう。

以上は、南郭先生文集に見える、本多忠統猗蘭侯の関係資料のうち、韻文に関するものをとり出した。これによって南郭から猗蘭侯への交渉をとらえることができたが、次に、本多忠統の猗蘭台集の中にある南郭関係の資料を集めて、その反対の猗蘭侯から南郭への交渉を見なければならぬが、それについては次号にまとめて論述することとしたい。

南郭先生文集中の猗蘭侯関係の文章

書 牘

南郭先生文集には、南郭が猗蘭侯に応答したもの、与えたものなど多くの書牘を収載している。凡そ書牘は、交遊のあとを探るのにもっとも実質的な資料となるものであり、このなかの一言一句みな両家の親密な関係を示すものである。ここでは紙幅の都合もあり、その大畧を取りあげてみたい。南郭が猗蘭侯に送った書牘を一覧すると次のとおりである。

- | | |
|------------------------------------|---------|
| 1 報西台侯 旧年以來、不走台上宴、云々 | 初編九12 B |
| 2 報西台侯 疇昔之命、敢忘大患 | 初十1 A |
| 3 答西台侯 承辱嘉命、披覽鏘鳴、恍如百尺台上、与聞鐘鼓管籥之音云々 | 初十5 A |
| 4 与西台侯 喬不吊昊天、前已罹災、台下周急之仁至矣 | 初十9 A |
| 5 報西台侯 捐書之貺、并佳序、奉之、 | 初十12 B |

本多猗蘭侯と服部南郭

本多猗蘭侯と服部南郭

6 報猗蘭侯	恵風載至、韻景維新	二編十3 A
7 答猗蘭侯	蘭台集刊藏之役、左右諸記室、克勤将完矣	二、十8 B
8 報猗蘭膝公	陽春徳沢、已布寰宇、亦莫非我公賛化所致云々	二十12 A
9 報猗蘭侯	賜示辛夷箋図様、古朴毫無脂粉之気云々	二十15 A
10 又	承奇卷為藏中珍	二十15 A
10 与猗蘭侯	百里之近、数日之暫而已、	三十8 B
12 報猗蘭侯	刻成猗蘭子一部、謹領恩賜	三十2 A
13 報猗蘭侯	拝辱賜書、伏審閣下、乃以万物仰沢之候、何福不除	三十9 B
14 報猗蘭侯	春王三朝、闕廷歛呼之声、早已外達云々	三十12 B
15 報喜寿老侯	仰想興居久矣、雲翰之賜、忽從天降、云々	四九15 A
16 報喜寿侯	拝読賜教、伏審台禧、更且奉想、時物維新、高園改観云々	四十16 B
17 報喜寿老侯	往者毎値中秋、陪歛桂花楼云々	四十八 A

これを見ると、初二三四編にわたって書牘が存している。享保十年の若年寄になるまでは西台侯と呼び、二編以後は猗蘭侯の号に変わっている。晩年高輪に移ってから喜寿侯とよんでいる。称号の変移がよくあらわれている。しかし、猗蘭侯の号は若年寄りになる以前、徂徠との交友の中にて用いられているので、厳密に区分されているのではない。侯はよく南郭に心をかけ、贈与のことも多かったらしく、南郭からのこの種の礼状がこの中にもまじっている。そのほか、本多侯の猗蘭台集と猗蘭子の刊行のときに序文を南郭に依頼しているが、その間の消息がこの書牘でよく記されているのも、侯を知るによく役立つところである。

右の、南郭から本多忠統猗蘭侯にあてたものに対して、本多忠統猗蘭侯から南郭子還にあてた書牘が、猗蘭台集に多く収録されている。兩者、併せて読むべきものである。

本多忠統から南郭にあてた書牘には、別にまた芙蕖館帖に所収のもの三通がある。芙蕖館帖は南郭の家に伝わったものが、のちに外に出て、

今、天理大学図書館に帰している。全七軸より成り、その中の一軸は徂徠あてである。この芙蓉館帖の巻首に、本多忠統から南郭に宛てた書牘、正月五日付のもの以下三通があり、又別に一通あって、真蹟の墨書した資料として貴重なものである。後に詳説したとおりである。

また、渡辺刀水氏著本多倚蘭侯（東洋文化第一三三―一三七）には倚蘭侯の詳細な伝記が考証されているが、その中に南郭から倚蘭侯宛の書牘を多数引用しているのも参考になる。とくに和文の書簡は文集には載せていないので、伝来のものを探し求めて頼るほかはなく、貴重な資料である。

著書の序跋

倚蘭台集序 服部南郭撰 二編七4B

昔者吾友滕東壁。為_レ喬稱_二倚蘭侯_一。好_レ学不_レ倦。雖_レ居_二侯伯采觀之間_一。燕処超然。有_レ樂_二於斯_一矣。亡_レ幾。侯延_二徂徠先生_一。則喬亦同_二同盟諸子_一從_二遊其邸_一。遊則雜_二坐分_一席。杯酒相勸。簡牘相命。酒酣飲洽。奮_二袖相謂曰_一。有_レ是哉經世大業之事。立言不朽之志。非_二苟而已_一也。夫人綱人紀。彝倫攸_レ叙。暨天地之博厚高明。日月之景象。風雲霜露。鳥獸草木。山嶽江海之区分。近取_二諸身_一。遠取_二諸物_一。紛乎多哉。況乎上下而数千百年。縱橫環海。巨億万里。以至_二無垠_一。其唯視_レ彼猶_レ此。視_レ古猶_レ今者学。而言_レ之而行_レ遠者文乎。蓋亦嘆_二古之不_レ同_一時。感_二今之不可_レ常也_一。即侯貴而好_レ学。三墳為_二金玉_一。五典為_二鐘鼓_一。樂_レ此不_レ倦。燕好飲食衍衍如也。凡喬所_レ及_レ見。莫_レ不_レ若聞_二之東壁_一。蓋數年而侯就_二朝職_一。無_レ遑_二復追_二前宴_一。時東壁已卒。餘子亦稍稍離散。斯遊且廢。已而侯告病不_レ朝。弥_二年解職_一。其間客無_二敢至_一。能至者独所_二親交_一二三子而已。喬亦在_二數中_一往請。則侯閉_レ閣蕭然燕居。亦独読_レ書不_レ休。顧謂_レ喬曰。噫。彼一時也。日月逝矣。事隨而異。雖_レ然。為_レ学由_レ己。而由_レ人乎哉。則所謂立言不朽。樂_二在其中_一。曷嘗自棄如_レ土也哉。喬愈益与_二知侯志_一也。遂乃數數乎往。則亦相對終_レ日。簡牘之外。無_二它雜事_一。侯亦愈益披_二腹心_一。示_二情素_一。稍稍以_レ此為_レ可_レ樂焉。亡_レ幾。侯復起_二於祠官_一。尋遷_二今職_一。今職也。副_二貳執政_一。内參_二坐論之議_一。外則領_二諸曹事_一。蓋大府而劇職云。侯固以_二在公之務_一。且宜_レ避_二請属_一。即開_レ閣見_レ延。亦皆承式服采之客。而侯日坐聽_レ政而已。餘一切不_レ敢通_レ謁焉。而徂徠先生亦卒。諸子愈益寥落矣。独喬猶尚以_二旧盟之餘_一。時時得_レ侯_二其退食之間_一。有_レ間則亦必及_二簡牘_一。必且歛然道_レ故。道_レ故則未_レ嘗不_レ嘆_二昔遊之難_一追。憾_二逝者之不_レ返也_一。惟侯方_二庶績咸熙之時_一。固當_二夙夜克念寅_二亮百揆_一。遑及_二厥他_一。而凡喬所_レ及_レ見。侯之好_レ学。

積年異事。而後益知有樂於斯一矣。即是集也。侯台侍史所隨而錄者。備三失亡一也。喬偶取而閱之。乃卒業之間。昔者邈焉所及見者。恍乎若在三心目一。則長逝者。亦既宛若作乎九原一。左提右攜。歛語一堂一。即侯之所經歷游覽一。若親從其行一。駕青虬。駢白螭。仙仙乎觀乎山嶽江海。所有草木鳥獸風雲万物之象。於是乎喟然而起。屬之侍史一。相語曰。夫古之立言不朽者。亦猶是乎。今夫嘗試令三人名列十數年之故一。雖邇乎。有志之乎。即志有能載其容若親見乎。時乎難常。境乎易移。況乎上下而數千百年。縱橫環海。巨億万里。有能志之。視古猶今。視彼猶此者乎。有是哉文。唯其有之。是以樂之。夫既視古猶今乎。安在其古之不同時也。視古猶今矣。則後之視今。亦猶今乎。安在其今之不可常也。惟侯以道輔翼世主一。功名必著於春秋一。斯乃固然。然文雅有餘。相因以行遠。且居移氣。養移體。何斯文之優游不迫。然則是集也。侯之所樂具有焉。謂之侯志一。乃慫慂侍史一。使刻於侯藏一焉。樂府古今詩。雜文備矣。亦因史所錄。不為采摭一。不為纂次一。侯台稱猗蘭一。以為集名一。今年壬子。侯自西台一。移封神戶一。所錄初稿至移封之前一。神戶以往。輒復將有所錄。則次自三編一。有埃之無窮一。享保壬子秋九月服元喬序。

猗蘭台集序

昔者、吾が友、膝東壁（安藤東野）、喬（南郭）の爲めに猗蘭侯を称すらく、学を好んで倦まず、「侯伯采觀の間に居るといへども、燕処超然」（老子二六の語による）として、斯に楽しむことあり。幾ばくもなく、侯、徂来先生を延く。則ち喬も亦、同盟諸子と同じく、其の邸に從遊す。遊ぶときは則ち坐を雑え、席を分ち、杯酒相勸め簡牘相命ず。酒酣に飲洽して袖を奮つて相謂いて曰く、是れあるかな、経世大業の事、立言不朽の志、（魏文帝典論に文章は経国の大業不朽の盛事という。左伝襄公二四に、大上、立德あり、其次、立功あり、其次、立言あり、久しと雖も廢せず、此を不朽と謂うとある）苟にするのみに非ざるなり。夫れ人綱、人紀、彝倫の叙ぶるところ、暨天地の博厚高明、日月の暉（懸）象、風雲霜露、鳥獸草木、山嶽江海の区分、近くは諸を身に取り、遠くは諸を物に取り、紛として多い哉。況んや上下して數千百年、縱橫環海、巨億万里、以つて垠なきに至る。其れ唯、彼を視ること猶お此のごとく、古を視ること猶お今のごとくなるものは学にして、之を言つて遠きに行わるるものは文かと。蓋し亦、古の時を同じくせざるを歎じ、今の常にすべからざるを感ずるなり。即ち、侯、貴にして学を好み、三墳を金玉と爲し、五典を鐘鼓となし、此を樂みて倦まず、燕好飲食、衍衍如（やわらぎたのしむこと）たり。凡そ喬が見るに及ぶところ、之を東壁（安藤東野）に聞くが若くならざることなし。蓋し數年にして、侯、朝職に就いて、復た前宴を追うに違なし。時に東壁、己に卒し（享

保四年卒す、餘子も亦稍稍離散して、斯の遊且く廢す。已にして侯、告病して朝せざることに年に弥りて職を解く。その間、客、敢て至ることなし。能く至るものは、独り親交するところの二三子のみ。喬も亦数中に在り。往いて請えば、則ち侯、閣を閉して蕭然として燕居す。亦、独り書を読み休まず。顧みて喬に謂いて曰く、噫、彼も一時なり（孟子、公孫丑篇、彼一時、此一時也とある）、日月逝きぬ。事、随つて異なる。然りとはいえども學を為すこと、已に由る、人に由らんや。則ち、所謂、立言不朽、樂しみ其の中に在り（樂その中に在りは論語のことば）、曷ぞ嘗て自ら棄てて土の如くせんやと。喬、愈々益々侯の志を与り知るや、遂に乃ち数数往けば、則ち亦相對して日を終う。簡牘の外、他の雜事なし。侯も亦、愈々益々腹心を披きて情素を示す。稍稍に此を以て樂しむべきと為す。幾くもなくして、侯復た祠官（寺社奉行）に起ち、尋いで今の職（若年寄）に遷る。今の職や、執政を副貳し。内、坐論の議に參し、外は則ち諸曹事を領す。蓋し、大府にして劇職と云う。侯、固より在公の務を以て、且つ宜しく請属を避くべきを、即ち閣を開きて延かるるも、亦皆、承式服采の客にして、侯、日々坐して政を聴くのみ。餘は一切、敢て謁を通ぜず。而して徂來先生も亦卒し（享保十三年没一七二八）、諸子愈々益々膠落す。独り喬、猶尚、旧盟の餘を以て、時々、其の退食之間（朝廷から自宅へ帰っているとき）に候うを得、間あるときは、則ち亦必ず簡牘に及び、必ず且つ歛然として故を道う。故を道えば則ち未だ嘗て昔遊の迫い難きを歎じ、逝者の返らざるを憾まずんばあらず。惟、侯、庶績咸熙の時に方って、固より當に夙夜に克念し、百揆を寅亮（つつしみあきらかにする）すべし。違、厥の他に及ばんや。而して凡そ喬が見るに及ぶところ、侯の學を好む、年を積みて事を異にす。而してのち、益々斯に樂しむことあるを知る。即ち、是の集や、侯台の侍史の随つて録するところのもの、失亡に備うとなり。喬、偶取りて之を閲するに、乃ち業を卒うるの間、昔者、邈焉として見るに及ぶところのもの、恍として心目に在るがごとし。則ち長く近くものも亦既に宛として九原に作り、左提右攜、一堂に歛語するがごとし。即ち侯の経歴遊覽するところ、親しく其の行に従つて、青虬に駕し、白螭を驂にし、仙仙乎として、山嶽江流、有るところの草木鳥獸、風雲万物の象を觀るがごとし。是に於てか、喟然として起ち、之を侍史に属して相語つて曰く。夫れ古の立言不朽なるものも亦、猶お是のごときか。今、夫れ、嘗て試みに人をして、十数年の故を名列せしめ、遷しといえども之を志することありや。即ち志するも、能く其の容を載せ、親しく見るがごとくなることありや。時は常にしがたし。境は移り易し。況んや上下、数千百年、縦横環海、巨億万里、能く之を志して、古を視ること猶お今のごとく、彼を視ること猶お此のごときありや。是れあるかな文。唯其れ之れあり。是を以て之を樂しむは、夫れ既に古を視ること猶お今のごときか。安んぞ其の古の時を同じくせざるに在らん。古を視ること猶お今の

ごとければ、則ち後の今を視ることも亦猶お今のごときか。安んぞ其の今の常にすべからざるに在らん。惟、侯、道を以って世主を輔翼し、功名、必ず春秋（歴史）に著わさんこと、斯乃固より然り。然れども文雅、餘あれば相因って以って遠きに行わる。且つ「居は氣を移し、養は体を移す。（孟子尽心篇のことば）」何ぞ斯文の優游、迫らざる。然らば則ち是の集や、侯の樂しむところ具にあり。之を侯の志と謂う。乃ち侍史に懇懇して侯の藏に刻せしむ。樂府古今詩、雜文備はる。亦史の録するところに因って、采摭を為さず。纂次を為さず。侯、台を猗蘭と称す。以って集の名と為す。今年壬子（享保十七年一七三二）、侯、西台（西代、河内長野）より神戸（鈴鹿市神戸）に移封す。録するところ、初稿より移封の前に至り、神戸以往、輒ち復た將に録するところあらんとす。則ち二編より次で、之を無窮に竣つことあらん。

この文は、侯の人物を知るのにもっとも重要な資料となるものである。古文辞派の文体によって作られ、經史の古典の用語を自由に駆使するのが特色となっているので、典雅で含蓄の深い作風をなしている。

なお、猗蘭台集については本学論集第十六号（昭和五十七年十一月刊）小著、本多猗蘭侯と荻生徂徠に詳説した。なお、この集の刊行には、侯が南郭に一切を委任していたという。（渡辺刀水氏、本多猗蘭侯三、東洋文化一三五号）。

猗蘭子序 服部南郭撰 二編七10 A

余読古諸子書。未嘗不喟然歎也。曰古之立言載道。曷嘗不施之行事哉。自如孔氏七十子之徒。雖曰管晏於覇。孟荀於儒。亦皆其人負命世之才。抱有為之器。遠觀法言。近察時勢。如有所言者。必有其所試矣。至夫老子唱道家言。莊周列禦寇。因載怪迂之談。墨翟禽滑釐。節用而大艱。及孫臏之兵陣。商鞅申韓之名法。雖其人之瞻智哉。其始也少濫耳。則其終必至逕庭無所用之。不則苛察少恩。愈切愈刻。亦皆隨時抑揚。譁衆取寵。然百家之學。各有其長。當其時。言礼樂者。溺其職矣。於是慎到田駢宋鉞公孫龍鄒衍李悝尸子吁子。雜家從橫之徒。紛紛復起。然後鈎有鬚。卵有毛。無不可言。其極也至謂処士橫議。而一掃乃玉石俱焚。則祇足以為衰世煽災。蓋亦末造之變也。後代芸文益博。操觚之士。動乃數十萬言。然大抵率耀智自售。或務高玄空論。古先之遺。視為文具。豈以郡縣異制。礼度多違。可一言。可一言。要其歸。亦如捉影耳。吾國家建國分治。太平之治。百有餘年。天下皞皞然。待礼樂之成久矣。乃神戸侯以三列侯入參大政。於茲一紀昌言俞咈之餘。退乃有所論著焉。夫君子好古。非惟以其典雅可觀而已矣。蓋亦在於施用焉。伝曰。徵諸庶民。考諸三王而不繆。建諸天地而不悖者。有旨哉。有旨哉。俟百世而不惑。視諸今可觀也。亦

猶_レ挹_二水於河_一。而求_中火於燧_上也。則君子學_二古_一。豈徒哉。夫侯亦行_二古之道_一也。是書也。文辭簡遠。直已並_二軌於秦以前_一。董劉而下則無_レ及焉。乃侯篤_二於古_一。可_レ謂躬与_レ之化矣。侯家舍人。梓而藏焉。侯名忠統。字大乾。猗蘭為_レ号。所以命_レ書也。

猗蘭子序

余、古諸子の書を読んで、未だ嘗で喟然として歎ぜずんばあらず。曰く、古の言を立て道を載る、曷ぞ嘗て之を行事に施さざらんや。孔子七十子の徒の如きより、管（管仲）、晏（晏嬰）が覇に於る、孟（孟軻）、荀（荀況）の儒に於ると曰うと雖も、亦皆その人、命世の才を負い、有為の器を抱き、遠く法言を觀、近く時勢を察し、如し言うところのものあれば、必ず試みるころあり。夫の老子、道家の言を唱するに至り（唱せしより）、莊周、列禦寇、因って怪迂の談を載せ、墨翟、禽滑釐（墨子の弟子）、用を節して大穀（儉約）なり。孫吳（孫武と吳起）の兵陣、商鞅、申（申不害）韓（韓非）の名法とに及び、其の人の瞻智なりといえども、其の始めや、少しく濫なるのみと。則ち其の後、必ず逕庭して之を用うるところなきに至る。然らざれば苛察（きびしく吟味する）少恩、いよいよ切にいよいよ刻なり。亦皆、時に随って抑揚、衆に譁_レして寵を取る。然れども百家の学、各々長ずるところあり。其の時に當って、礼樂を言うものは、其の職に溺るとす。是に於て、慎到、田駢、宋鉞、公孫龍、鄒衍、李悝、尸子、吁子、雜家從横の徒、紛紛として復起る。然してのち、「鉤に鬚あり、卵に毛あり」（荀子、不苟篇、詭弁家の論）、言うべからざるなし。其の極や処士横議すと謂いて、一掃して乃ち玉石俱に焚かるるに至るときは、則ち祗、以って衰世の爲めに災を煽ぐに足る。蓋し亦末造の変なり。後代、藝文益々博く、操觚の士、動もすれば乃ち数十万言、然れども、大抵率ね、智を耀し自ら售り、或は務めて空論を高くし、古先の遺、視て文具（表面の飾りだけ具わったもの）と為す。豈に郡県、制を異にし、礼度、違多きを以ってか。以って言うべく、以って言うなかるべし。其の帰を要するに、亦影を捉_レうるが如きのみ。吾が国家、国を建て治を分つ、太平の治き百有余年、天下皞々然（広大自得の良）として、礼樂の成るを待つこと久し。乃ち、神戸侯、列侯を以って入りて大政に参すること、茲に於て一紀、昌言俞咈（ためになるよいことば、然りといたりそうでないこと）の餘、退いて乃ち論著するところあり。夫れ、君子、古を好む。其の典雅視るべきを以てするのみに非ざるなり。蓋し亦、施用するに在り。伝に曰く、「諸を庶民に徴し、諸を三王に考えて、而して繆_レらず。諸を天地に建てて而して悖_レらざる」もの（礼記中庸）、旨あるかな。旨あるかな。「百世を俟_レちて而して惑わず」（中庸）、諸を今に視て、觀_レつべきなり。亦猶お、水を河に挹_レみて、火を燧に求むるがごとし。則ち、君子、古を学ぶ、豈に徒_レならんや。夫れ侯も亦古の道を行えり。是の書や、文辭簡遠、直ちに已に

本多猗蘭侯と服部南郭

軌を秦以前に並べて、董劉（董仲舒、劉向）より下は則ち及ぶなし。乃ち侯の古に篤き、躬みづか、之と化すると謂うべし。侯家の舍人（事務員）、梓して蔵す。侯、名は忠統、字は大乾、猗蘭を号と為す。書に命ずる（名づくる）所以ゆえんなり。

南郭稿序 本多忠統撰 南郭文集序

古文辞者古言也。古言通。而古經可論也。蓋漢以上。塗歌邑誦。亦能言也。將何所不可為也。在昔仲尼刪六經。作春秋。千載不朽。昭昭乎若揭日月。蓋道之者文。修之者人。言高旨遠。辭約義微。以三後世觀之。何以其不可誦之至于斯也。至三世與人交。人非聖人。取舍不一。而堅白紛紛。唯理是求。甚者遂至以私意立眇論。謂我即聖人也。進退周旋。未嘗不中道。而言語文辞。徒為贅疣。彼何乃敵精神。以苑其鴻裁。猗其艷辞為乎。自是文日衰。人亦益汙。但以便於時為益。邈哉上古。若隔一洪荒。方今吾東方。膺

聖明之運。徂來先生者出。修古文。知古言。且為三世迷惑。湔洗漱滌。除其困篤。鍼石所為。脫然復其本。蓋距仲尼二千有餘歲。而古經始通矣。而世之論者。猶且謂是独文辞耳。譬之享雖加籩。奚有味其器乎。苟有穀蒸。何待其加。殊不知雖仲尼時。猶訪求聚輯。以正礼樂。況後世無可觀之礼。無可聽之樂。名存物廢。物存名廢。文王既沒。独幸斯文之未喪。仲尼所傳。亦唯是耳。何必後世新安之說。舍彼取此乎。又何以疑其不可誦之語乎。子遷既受業。業成。人人以從游。則乃經乃文。教之不倦。講習有年。浸淫厭厭。有刀者斲諸。有玉者錯諸。吾党小子。莫有不憤然自勉者矣。乃先生大復其始。而子遷与有補助焉。亦能使學者知古文得古言。而後古經可論也。子遷有稿。門人請梓。子遷不許。忠統曰。方今古業散失。知言者鮮矣。使之木鐸天下。搢紳諸子。靡然嚮風者。誰之責哉。又且使世唯古言是則。亦皆塗歌邑誦可歌可誦。而後古經可臨者。蓋繇是始也。子遷其急之。蓋子遷之不許也。以志有所欲為。不欲以此伎一称焉。然子遷之文。無不古者焉。則亦使世知無所不可為也。知無所可為。而後古經可論。即亦子遷之志也。享保癸卯冬十月西台滕忠統序。

大垣 守煥明書

南郭稿序

古文辞は古言なり。古言通じて古經、論すべきなり。蓋し、漢以上は塗歌邑誦（顔延年三月三日曲水序のことば）も亦能く言うなり。將た何

んの為すべからざるところあらん。在昔、仲尼、六經を刪し、春秋を作り、千載朽ちず、昭々乎として日月を掲ぐるがごとし。蓋し、之を道うものは文、之を修するものは人。言高く、旨遠く、辞は約に義は微なり。後世を以て之を觀るに、何を以てか其の讀むべからざるの斯に至るや、世と人と交するに至って、人々聖人に非ず、取舍、一ならず、而して堅白紛々（公孫竜の堅白同異の弁）、唯、理是れ求む。甚しきは遂に私意を以て眇論を立て、我即ち聖人なり、進退周旋、未だ嘗て道に中らずんばあらず、而して言語文辞は、徒に贅疣（あまつた肉といふ）、役に立たないもの）を為す、彼れ何ぞ乃ち精神を敝やし、以て其の鴻裁を苑し（苑は鬱結すること）、其の艷辞を獵することを為すやと謂うに至る。是れより、文日々に衰え、人も亦益々汗る。但、時に便なるを以て、益ありと為す。邈たるかな上古、一洪荒を隔つるがごとし。方今、吾が東方、聖明の運に膺り、徂徠先生なる者出で、古文を修し、古言を知る。且つ世の病惑せるがために、漸洗漱滌して其の困篤を除く。鍼石の為すところ、脱然として其の本に復す。蓋し仲尼を距つること二千有餘歳にして、古經始めて通ず。而して世の論者、猶且つ謂えらく、是れ独り文辞のみ。之を譬うるに、享に加籩あり（左伝昭六のことば之を享するに加籩あり）といえども、奚ぞ其の器に味あらんや。苟くも穀蒸（調味した骨付きの切肉左伝宣十六に見ゆ）あらば、何ぞ其の加を待たんと。殊に知らず、仲尼の時といえども、猶お訪求聚輯して、以て礼樂を正す。況んや後世、觀つべきの礼なく、聴くべきの樂なし、名存すれば物廢し、物存すれば名廢す。文王既に没して、独り斯文の未だ喪びざる（論語子罕篇のごとば天之未喪斯文）を幸とす。仲尼の伝うるところも、亦唯、是れのみ。何ぞ後世新安の説（宋の朱熹の説）を必ずとし、彼を捨てて此を取らんや。又、何を以てか其の讀むべからざるの語を疑わんや。子遷、既に業を受く。業成る、人々以て從遊すれば、則ち乃ち經乃ち文、之を教えて倦まず。講習、年あり。浸淫厭飫、刀あるものは、輶し（みがく）、玉あるものは錯す（細工する）。吾党の小子、憤然として自ら勉めざるものあることなし。乃ち先生大いに其の始めに復し、而して子遷、與つて助くることあり。亦能く學者をして、古文に因って古言を得、而るのち古經の論ずべきことを知らしむなり。子遷稿あり。門人、梓せんと請う。子遷許さず。忠統曰く、方今、古業散失し、知言の者鮮し。之をして天下に木鐸し（指導する）、摺紳諸子、靡然として風に嚮はしめんものは、誰が責ぞや。又、且つ世をして唯古言、是れ則り、亦皆塗歌邑誦、歌うべく誦すべくして、しかるのちに古經、臨すべから使めんは、蓋し是より始まらん。子遷、其れ、急にせよ。蓋し子遷が許さざるや、志、為さまく欲するところあるを以て、此の伎を以て称せられんことを欲せざるなり。然れども子遷が文、古ならざるなきときは、則ち亦、世をして為すべからざるところなきことを知らしむるなり。為すべからざるところなきことを知って、而してのちに、

本多猗蘭侯と服部南郭

古経、論すべきなり。即ち亦、子遷の志なり。享保癸卯冬十月西台膝忠統序す。

大垣守煥明書す（守屋氏字は秀緯、東野に学び徂徠門に入る）

南郭先生文集二稿跋 本多忠統撰 二編跋

南郭先生二稿成矣。統閱焉以為向徂徠先生言將不_レ及見_二其二稿三稿_一者出。果如_二其言_一也。先生有_レ命。見_二此稿_一者。行則猶且其褒揚倍_二乎初稿_一。命哉。無_二如_レ之何_一也。夫大業大成者。必在_二時与_レ命_一。苟此二者不_レ合。曷得_二其成_一乎。時曰槩弓之平也。命曰黃耆之長也。時雖_レ平而命短則不_レ能。命雖_レ長而時乱則不_レ能。服先生殆合_二此二者_一也。矧子遷今年五十有五。天和守全。發文愈健。其及_二三稿四稿_一。必將_レ盛也。斯天覆_二護服生_一者也。統今四十有七。其能相保。而題跋三四。天斯亦覆_二護_二子_一者也。丁巳之秋。膝忠統題。

南郭先生文集二稿跋 本多忠統撰

南郭先生二稿成れり。統、焉_{これ}を閲し、以為_{おも}く、向_{さき}に徂徠先生、將に其の二稿三稿を見るに及ばざらんとすと言_いえるもの出づること、果して其の言の如きなり。先生、命あり。此の稿を見るもの、行けば則ち猶お且つ其の褒揚、初稿に倍する、命なるかな。之を如何ともするなきなり。夫れ大業の大成するもの、必ず時と命とに在り。苟_いもこの二者、合せざれば、曷_いんぞ其の成るを得んや。時は槩弓_{かうきゆう}（弓を弓ぶくろに入れ、戦をやめる）の平と曰い、命は黃耆（黄髪で顔にしみのある老人）の長と曰う。時、平なりと雖も、命短なれば則ち能わす。命長しと雖も、時、乱るれば能わす。服先生は、此の二者に合するものなり。矧_いや子遷、今年五十有五。天和守全、發文愈く健なり。其の三稿四稿に及ぶこと、必ず將に盛ならんとす。斯_かれ天、服生を覆護するものなり。統、今、四十有七。其の能く相保して、題跋すること三四、斯_{すな}ち亦、天、二子を覆護するものなり、丁巳（元文二年、一七三七）の秋、膝忠統題す。

寿序

西台膝公寿序 服部南郭撰 二編六八A

西台膝公入参_二政事_一之六年。甫四十也。初公以_二列侯_一奉_二朝請_一而已。列侯至貴倨。即肥甘采色。驅逐声音。何求而不_レ得。乃必乘_レ人而鬪_二其捷_一。人將目_レ之。色平_レ之。無_レ所違以供之。因以容_二与其心_一。奚不可哉。唯公則說_二礼樂_一。敦_二詩書_一也。固不_レ欲_二以_二其富貴_一驕_二士_一。即天縱

之多能。無一所挾。則於徂來先生師之矣。於滕東壁諸子友之矣。遂及余輩。未嘗不好善而忘勢。余輩亦有公之勢。則不與之友矣。故公之耽學。即自諛聞。日以動衆。金玉其相。追琢其章。猶且親師樂友。篤信其道。恬然如一儒士。而若將終身焉。公嘗謂余曰。天下有道則見。君子在世。何嘗不欲當其世。而利沢施于人者乎。寡人雖最爾。尚藉先世之基業。而受國家之渥恩。乃得節春秋。而奉述職之典。寡人豈猶不欲效此身於萬一之報者乎。顧亦有命矣。故今且密爾自娛於斯文。斯文既樂矣哉。則幸由此一有不朽。豈猶不愈齊景千駟。民無稱焉乎。唯是日回月周。歲不我與。苟志學也。任重而道遠。尺璧寸陰。汲汲乎唯恐不及。寡人而後知人欲壽考哉。蓋公方富於年。而其志也。欲深造之篤。乃愛惜歲月也。余輩故且榮吾党有公。則歲時心祝之曰必使長久斯文。余所及知者如此。久之公帥番軍。尋乃謝病。亡幾起領祠曹。兼聽郡國之事。天下稍稍想見其風聲。數月果遷今職。今職固重大。則上佐六典。下主百僚。政莫弗與。事莫弗聽。諸有司所承事于公者。乃出朝則之朝焉。退邸則之邸焉。下令受成。裨益相仍。其所以夙夜者。蓋竭日窮年。賢勞亦劇矣。然後六年於此。朝野翕然。無不稱公之治務者也。人且從旁謂公之好學。昔嘗優游卒歲。今安可得哉。是乃以私視公者也。今而百僚諸有司。所承事于公者。則曰何以令我公久守位也。亦職有利哉。其有緇衣之愛。則曰公亦勞乎。而公尚富於年。無憂其壽考。何以令我公穆穆在乃位。而得見其功業之盛哉。則公公于天下。無不皆祝之曰必使久位者也。是乃公道行之時也。公報國家之素志也。然則公今之所夙夜。亦猶昔之所愛惜。而公志可知也。則吾党之士。固當歛欣公之道行於天下也。曷可得私公哉。且夫士之為學。居則曰。不吾知也。然今國家依封建之制。上下分定。則何以哉。即有讀書懷獨行君子之德。如季次原憲。亦以經術緣飾一吏事。猶且不得。則隱居放言死而已。不則上說下教。強聒不舍。迂大而闕弁。文具難施。終無益於國也。唯公則自諛聞動衆。以至化民成俗。終始典于學。大雅整身。施及黎庶矣。業已示天下有能為也。雖然。君子學則愛人。公而不學。焉能如此。則吾党亦有榮哉。今年六月。公之覽揆。二三子與喬等。作文奉壽。猶尚以私也。公之治務。天下無不稱者。則天下豈猶不祝公之綏履者乎。

西台滕公寿序

西台滕公、入りて政事に参するの六年、甫めて四十なり（享保十五年一七三〇）。初め公、列侯を以って朝制に奉ずるのみ（帝鑑問詰のこと）。列侯は至て貴倨なり。即ち、肥甘采色、驅逐声音、何を求めてか得ざらん。乃ち必ず人に乗じて其の捷を鬪わしめ、人、將た、目、之に榮き（大

本多猗蘭侯と服部南郭

名の目をくまますこと、孔子世家に、匹夫にして諸侯を熒惑する者とある、色、之に平にし、違うところなくして以て供すれば、(臣下が大名の機嫌をとることをいう)、因つて以てその心を容与するも、奚ぞ不可ならんや。唯、公は則ち、礼楽を説よび詩書に敦あつし。固より其の富貴を以て士に驕おごることを欲せず。即ち天縱の多能、一も挟さしはさむところなし。則ち、徂徠先生に於て、之を師とし、膝東壁(安藤東野)諸子に於ては、之を友とす。遂に余が輩に及び。未だ嘗て善を好んで勢を忘れずんばあらず。余が輩も亦、公の勢を有りとせば、則ち之と友たらし。故に公の学に耽ふける、即ち諛聞より日々以て衆を動かし、「金玉、其れ相し、其の章を追琢す」(詩経、大雅、棫櫟篇のことば)、猶お且つ師に親しみ友を楽しみ、篤く其の道を信じて、恬然として一儒士の如し。而して將に身を終えんとするがごとし。公、嘗て余に謂いて曰く、天下、道有るときは則ち見る。君子の世に在るや、何ぞ嘗てその世に當つて、利沢、人に施すことを欲ぜざるものならんや。寡人、蒧爾(小さいさま謙遜という)と雖も、尚お先世の基業に藉より、而して国家の渥恩を受く。乃ち、春秋に節して述職の典を奉ずることを得。寡人、豈あに猶お此の身を万一の報に效いたすことを欲せざるものならんや。願ねがうに亦、命あり。故に今、且く密爾として自ら斯文を娛たのむ。斯文既に楽しきかな。則ち、幸いに此に由つて一たびも朽ちざるあらば、豈猶お、齐景の千駟(齊の景公が四千頭の馬を飼つた故事)、民、称するなきに愈まさらざらんや。唯是れ、日回り月周る。歳我ともならず。苟いしくも学に志すや、任重くして道遠し。尺璧寸陰、汲々として、唯、及ばざらんことを恐る。寡人よりしてのち、人の寿考を欲することを知らん哉。蓋し、公方に年に富めり。而して其の志や深く造いたんと欲するの篤あつき、乃ち、歳月を愛惜するなり。余が輩、故より且つ吾が党の公有るを栄とすれば、則ち、歳時、心に之を祝して曰く、必ず斯文に長久ならしめんと。余の知るに及ぶところのもの此の如し。之を久しくして、公番軍に帥たり(大番頭)。尋いで乃ち謝病す。幾いくばくもなくして起つて祠曹を領す。兼て郡国の事を聴く(寺社奉行兼奏者番)。天下、稍々其の風声を想見す。数月にして果して今の職に遷る(若年寄)。今の職、固より重且つ大なり。則ち、上、六典を佐たすけ、下、百僚を主つかさどる。政、与らざることなし。事、聴かざることなし。諸有司の公に承事するところのものは、乃ち、朝に出ずれば則ち朝に之ゆく。邸に退くれば則ち、邸に之ゆく。令を下し成を受け、裨益、相仍よる。其の夙夜する所以のものは、蓋し、日を竭つくし、年を窮きめて、賢勞もまた劇し。然してのち、此に六年なり。朝野、翕然として公の治務を称せざるものなし。人、且つ、傍より謂いえらく、その学を好むこと、昔、嘗て優游して年を卒おう。今、安んぞ得べけんや。是れ乃ち私を以て公を視るものなり。今にして百僚、諸有司、公に承事するところの者は、則ち曰く、何を以てか我公をして久しく位を守らしめんや。亦、職として利あらんや。其の緇衣の愛あるは、則ち曰く、公も亦勞せんか

と。而して公、尚^なお年に富めり。其の寿考を憂うるなくして、何を以てか我が公をして穆々として乃位に在らしめて、その功業の盛んなるを見るを得んや。則ち、公を天下に公にして、皆、之を祝して、必ず位に久しから使めんと曰わざるものなきなり。是れ乃ち公の道の行わるるの時なり。（賢勞は賢明なるがために公務に使役されて疲労すること）。

公、国家に報ずる、素志なり。然らば則ち、公、今の夙夜するところなり。亦猶お昔の愛惜するところのごとくにして、公の志、知るべきなり。則ち、吾党の士、固より当に公の道の天下に行わるることを歎欣すべし。曷^{なん}ぞ公を私することを得べけんや。且つ夫れ、士の学を為すや、居るときは則ち曰く、吾を知らずと。然れども今、国家、封建の制に依り、上下分定すれば、則ち何を以てせんや。即ち、書を読み、独行君子の徳を懷^{いだ}くこと、季次（公哲哀）原憲（ともに孔子の弟子）の如きなる有るも、亦、経術を以て一吏事を縁飾せんことすら、猶且つ得ざれば、則ち隱居放言し死するのみ。しからざれば、上説き下教え、強聒^おして舍かず、迂大にして閎弁、文具、施し難く、終に凶に益なきなり。唯、公は則ち諛聞、衆を動かすより、以て民を化し俗を成すに至るまで、終始、学に典にす、大雅、身を整えて、施し黎庶に及ぶ。業已^{すでに}、天下に能為あることを示すなり。然りと雖も、君子、学べば則ち人を愛す。公にして学ばずんば、焉^{いず}ぞ能く、此の如くならん。則ち吾党も亦与りて榮あるかな。今年六月、公の覽揆（誕生日）、二三子、喬等と文を作り、奉寿す。猶尚、私を以てなり。公の治務、天下称せざるものなし。則ち天下、豈に猶お公の綏履（安寧幸福）を祝せざるものならんや。

この文は享保十五年、忠統公四十歳の祝賀のために作ったもので、侯の前半生の人物像をもっともよく書きあらわしたものである。普通の凡庸な大名ではなく学問識見の高い人物であること、中国周代の礼楽制度を基本とした高い理想をかけて政治家として生きている侯が、切々とした親愛の情をもって描かれている。

猗蘭侯五十寿序并詩 服部南郭撰 三編五17B

日猗蘭侯。年甫四十。実侯既参^二大政^一之六年。喬乃作^レ文致^レ祝。且為^二国家億兆^一。称^二願其久守^レ位。然亦大府劇職。貳公弘化之事。蓋重且繁矣。則人唯側見^二其邦国都鄙官府之治。日不^二遑給^一。不^レ無^レ過^二慮其勤勞^一也。侯今年五十矣。覽揆之燕。再在^二歳之六月^一。乃侯之辟容綽綽然如^レ故。而金錫圭璧。有^レ加^二於旧^一焉。無^レ論^二其德弥劭。政乃不^レ迷。則心逸日休。莅^二事有^レ忠。制^二義庶孚^一以行^レ之。則羣下咸喜。樂^中其凱弟^上。即至^二府門家庭之美^一。日熾月昌。於^レ斯為^レ盛。自^二羣公子^一。方且及^二高陽氏之多才^一。女公子淑姿。其数相若。鄂韓棠棣之懿。好合瑟琴之和。冠昏

孔云。慶無_二虛月_一。賀者蓋相_二望於路_一。猶且熊羆告_レ祥。芝蘭年殖。邸門無_二不_レ懸_レ弧之歲_一。凡世所_レ稱多福善事。若_二郭汾陽_一。悉爾翕集。無_レ憂者其唯侯乎。侯乃膺_二茲單厚_一。何福不_レ除。宜矣哉。侯之辟容寮綽。歲月所_レ息。有_レ加_二於旧_一焉。夫人所_二以害_レ養傷_レ和。不_レ綏_二天福_一者。憂患莫大焉。而其所_二以有_二大患_一者。得喪嬰_レ心。寵辱數驚。亡_レ巨亡_レ小。亦在_レ事者之大情也已。何以望_二乎侯所_レ以乎。侯則然哉。老聃云。靜以復_レ根。動而愈出。斯道也。侯蓋以_レ之。故侯之平生。未_レ嘗以_二榮觀_一害_レ其燕処之安_上。即居_二大府_一。領_二劇職_一。超然乎亦唯以_レ之。任雖_レ重。事雖_レ繁。於_二侯靜勝_一。猶_二囊籥不_レ屈也_一。夫然後端_二坐廟堂_一。朝無_二留事_一。羣下胥視。体_二侯無擾之心_一。諸吏文母_レ害。不_レ至_二亟疾苛察_一。乃重臣之体。故耳然矣。則人見以為_二勤勞_一乎。為_二榮觀_一乎。侯乃又何至_二自擾_二其所_レ以為_一。且夫大臣協_レ心。有_レ若_二畢召諸公_一。率亦以_二耆老_一在_レ朝。周之為_レ隆也。而侯年鼎盛。如_二川方至_一。永靖_二其位_一。老成典刑。天下孰不_二屬望_一。雖然。是非_二独侯德之素_一。乃已遇_二会昇平百年之運_一。又且國家官制之治。有_レ所_二職由_一焉。竊惟昭代。商_二隆前_一世。乃革_二郡縣浮薄之弊俗_一。考_二諸古昔_一。封_二建万国_一。大人世及以為_レ礼。乃又立_二政府_一等。總_二攝於朝_一。猶_二周大小宰之職_一。亦必俾_二親旧諸侯_一。入領_二其事_一。而雖_二解_レ職日_一。則茅土之享白若也。他留鎮諸府。若朝士大夫。内外分治。亦皆封地采邑。世祿剖符之盟無_レ渝。出_二入進_一退於國恩之中。在_レ朝猶_二在_レ家。則在位君子。坦蕩蕩。不_レ至_二患_一失之鄙_一。輕躁仕子。亦不_レ得_レ銳_二企及之志_一。貪競路塞。廉耻自重。而後風俗敦龐。不_レ尚_二文具_一。相与優_二游太平_一。繁祉老寿。人受_二其福_一。此非_レ所_二以超_二越歷世_一。比_二隆盛周_上之驗_中歟。況乎滕侯好_レ学。執_二古之道_一。動靜以_レ之。五福不_レ虧。固其所也。喬恭賦_二詩八章_一。將_レ授_二侯側瞻_一。以侑_二其寿筵之觴_上。然則侯而遇_二会今時_一。固不_レ可_レ以_二後世_一視_上為_レ。雅頌之道。周人可_レ則。然喬野人曰。穆如之誦。豈敢万_一一倣之云哉。抑以_二昭代_一。比_二隆盛周_一。維仲山甫。以期_二滕侯_一。是独可_二以無_レ慙焉矣_一。其詩曰。

維水朝_レ海。東國之紀。開_二建万邦_一。会_二同一軌_一。滕侯入覲。執_二此介圭_一。其德如玉。令聞日躋。

其德日躋。維后有_レ命。滕侯于止。贊_二是庶政_一。厥政維何。貳_二之_二三事_一。滕侯翼翼。不_レ懈_二其位_一。

周有_二卿士_一。滕侯所_レ則。周人有_レ言。古訓是式。滕侯好_レ学。居_レ政允臧。無_レ內無_レ外。不_レ顯_二其光_一。

滕侯在_レ朝。有_レ式_二周治_一。顯允君子。民之所_レ暨。在_レ朝二八。日月咸宜。緇衣之敝。屢斯改為。

滕侯令德。能歌_二神人_一。神所_レ勞矣。百禄日新。百禄維何。其姓衆多。維男為_レ麟。維女為_レ華。

滕侯家室。其衆寔繁。滕侯退_レ朝。翕其盈_レ門。私人蕃蕃。夏屋渠渠。傳御濟濟。滕侯樂胥。

賓之來燕。樂且笑語。旨酒維飽。嘉肴維旅。賓之來飲。滕侯有慶。既醉其德。稱三壽無疆。

維時滕侯。既富既有。無大無小。作朋眉壽。東海決決。東嶽巍巍。不震不騰。滕侯所綏。

猗蘭滕侯五十寿序并詩

日に猗蘭滕侯、年甫めて四十、実に侯既に大政に参するの六年、喬乃ち文を作りて祝を致し、且つ国家億兆の爲めに、その久しく位を守らんことを称願す。然も亦、大府は劇職、「貳公弘化」(書経、周書のことば)、三公の副官となつて広く政治教化を行うことのこと、蓋し、重くして且つ繁し。則ち人は唯だ側より其の邦国都鄙官府の治、日々違給せざるを見、其の勤勞を過慮することなきにあらざるなり。侯今年、五十なり。覽揆(誕生日)の燕、再び歳の六月にあり。乃ち侯の辟容(温潤な容白)、綽綽然として故の如し。而して金錫圭璧(精鍊すること)、旧に加うることあり。其の徳、弥劭にして、政乃ち迷わざれば、則ち心逸にして日々休し、事に莅んで忠あり。義を庶孚に制して以て之を行うときは、則ち群下咸喜び、其の凱弟を樂しむに論ずるなく、即ち府門家庭の美に至つても、日々熾んに月に昌に、斯に於て、盛と爲す。群公子より、方に且つ高陽氏の多才に及び、女公子淑姿、其の数相若く、鄂鞞棠棣の懿、好合瑟琴の和、冠昏孔だ云う、慶、虚月なく、賀者、蓋し路に相望む。猶且つ熊羆、祥を告げ(男子の生れる夢の告げ)、芝蘭、年々殖し、邸門、弧を懸けざるの歳なし(男子が生れると桑の弓を門に懸ける)。凡そ世の称するところの多福善事、郭汾陽(唐の郭子儀、孫が数十人あり一々知ることができなかった)の若くなる、悉く爾く翕集す。憂なきものは、其れ唯だ侯か。侯、乃ち茲の単厚(まことに厚いこと詩経)に膺り、何の福か除せざらん。宜なるかな。侯の辟容、寛綽、歳月の息するところ、旧に加うるあり。夫れ人の養を害し和を傷り、天福を綏んぜざる所以のものは、憂患より大なるはなし。而して其の大患ある所以のものは、得喪、心に嬰し、寵辱、数しば驚く。巨となく小となく、亦、事に在るものの大情のみ。何を以てか侯の以みる所を望まんや。侯は則ち然らんや。老聃云う、「静以て根に復し、動にして愈々出づ」と。斯の道や、侯蓋し之を以う。故に侯の平生、未だ嘗て采観を以て其の燕処の安きを害わず。即ち大府に居り、劇職を領するに、超然として亦唯、之を以ゆ。任、重しといえども、事、繁しといえども侯の静勝に於るや、猶お橐籥(かじやのふいごう)の屈せざるがごとし(老子、天地の間は猶橐籥のごときか虚にして屈せず)。夫れ然してのち、廟堂に端坐して、朝に留事なく、群下胥視して、侯の無擾の心を体し、諸吏、文、害するなく、亟疾苛察(細部にわたりきびしく吟味する漢書張釈之伝のことば)に至らず。乃ち重臣の体、故より宜しく然るべし。則ち人見て以て勤勞と為せるか。采観と為せるか。侯乃ち又何ぞ自ら其の以

う所を擾るに至らん。且つ夫れ大臣、心を協する、畢召諸公（畢公と召公ともに周の名君）の若くなるあり、率ね亦、耆老を以って朝に在り、周の隆と為なるなり。而して侯、年鼎に盛、川の方に至るが如く、永く其の位を靖んじて、老成典刑（詩經大雅蕩篇、老成の人なしと雖もなお典刑あり）、天下、孰か属望せざらん。然りといえども、是れ、独り侯の徳の素なるのみにあらず、乃ち已に昇平百年の運に遇会し、又且、国家官制の治、職とし由るところあり。竊に惟るに、昭代、前世に商鑒し、乃ち郡県浮薄の弊俗を革め、諸を古昔に考えて、万国を封建し、大人世及（父子世襲の意礼記）以って礼と為し、乃ち又政府二等を立て、朝に総摂し、猶お周の大小宰の職のごとし。亦、必ず、新旧の諸侯をして、入りて其の事を領せしむ。而して職を解くの日と雖も、茅土の享（諸侯を封ずるときの対遇）、自若たり。他、留鎮諸府、若しくは朝士大夫、内外分治するもまた皆封地采邑、世祿剖符の盟、渝ることなし。国恩の中に出入進退して、朝に在って猶お家に在るがごとし。則ち、在位の君子、坦として蕩蕩、失うことを患うるの鄙に至らず。輕躁の仕子、亦、企及の志を鋭することを得ず。貪競、路塞り、廉耻自ら重し。而して風俗敦龐（民風の厚大なこと）、文具を尚ばず。相与に太平に優游して、繁祉老寿、人々其の福を受く。此れ歴世を超越して隆を盛周に比する所以の驗に非ずや。況んや滕侯学を好み、古の道を執って、動靜、之を以う、五福、虧けず、固よりその所なり。喬、恭しく詩八章を賦して、將に侯の側の矇眊に授けて以って其の寿筵の觴を侑せん（すすめる）とす。然らば則ち、侯にして今時に遇会する、固より後世を以って視るべからず。雅頌の道、周人、則るべし。然れども、喬は野人なり。穆如の誦（詩經大雅、烝民篇、穆如清風）、豈に敢て万一、之に倣うと云わんや。抑昭代を以って隆を盛周に比し、維仲山甫、以って滕侯を期す、是れ独り以って慙ずることなかるべし、この詩に曰く。

維水、海に朝す、東国の紀。万邦を開き建て、一軌に会同す。滕侯入覲し、此の介圭を執る。其の徳、玉の如く、令聞、日々に躋る。

其の徳、日々に躋る。維れ后、命あり。滕侯に止まって、是の庶政を賛す。厥政、維れ何ぞ、之の三事に貳たり、滕侯翼翼、其の位に懈らず。周に卿士にあり、滕侯の則るところ。周人、言えることあり、「古訓、是れ式る」（詩經大雅烝民篇のことば）と。滕侯、学を好み、政に居て允に臧し。内となく外となく、其の光を顕さざらんや。

滕侯、朝に在る、周治に式ることあり。顕允なる君子、民の賢ぶところ。朝に在ること二八、日く月く、咸く宜し。緇衣の敝る、屢斯に改め為る。

滕侯令徳、能く神人に歌けらる。神の勞するところ、百禄、日々に新たなり。百禄、維何ぞ、其の姓衆多。維男は麟を為し、維女は華を為す。

膝侯家室、其衆、寔に繁し。膝侯、朝より退れば、翁として其れ門に盈つ。私人蕃蕃、夏屋渠渠。傳御濟濟、膝侯樂胥。

賁の来燕する、楽みて且つ笑語す。旨酒維れ飽き、嘉肴維れ旅ぬる（詩経賁之初筵、穀核維陳）。賁の来りて飲む。膝侯慶あり。既に其の徳に酔うて、寿無疆を称す。

維れ時、膝侯、既に富、既に有。大となく、小となく、眉寿に朋と作り。東海決決、東嶽巍巍たり。「震らず、騰らず」（詩経魯頌のことば）、膝侯、綏んずるところ。

この寿序は元文五年忠統公五十歳の祝賀のために作られたもので、侯のもっともよき理解者である南郭が、侯の全人格を正しく記述したものと云つてよく、侯の人物を知るにはこれにまさるものはない。

猗蘭膝公六十寿宴序 服部南郭撰 四編四6B

年紀寛延。歲次庚午。猗蘭膝公。寿甫六十矣。華誕之辰。本在六月。燕喜之日。前用上春。公秉職久參兩朝之政。輔治既敷。必世之仁。躬履行年化。耳順庶事聞。明率由於旧章。称孚先之故老。是以良弼作砥之望。時已益切。康侯錫馬之榮。日用蕃庶。況夫群公諸伯。同位敵體之交。府僚門下。攀龍附鳳之属。使客接踵。玉帛盈庭。申慶其德之弥劬。称願其禧之延長。莫不至矣。固可知也。而公之享福。人所太羨者。莫如多斯男。尽是象賢。令子女。共為淑德。振振焉。繩繩焉。是日也。群集一堂。更奉万祉。舞彩服以承顔。称瓊觴而愉色。琴瑟在御。冠笄滿前。且公文德所育。才美相紹。雅歌永言。篇章成什。亦皆致愛自尽。不待他求。若夫芳鮮清酏。玉食之珍。綺筵續器。華堂之飾。固自維辟之常。而不遑称也。加旃条風協時令以徐至。天日待春和而愈輝。吹玉樹乎交開。照白華之並潔。公乃怡然臨座。陶爾拳杯。膺其雍熙。飽其孝養。可謂人倫至樂。侯家盛歛矣。喬猶幸犬馬之齒。膽印松栢之姿。前已再進賀辭。今而三遭令節。茲雖老矣。可無言哉。重序嘉祥。永冀朋寿。聊託九如之祝。綴以六韻之詩。

猗蘭侯六十寿詩 四編一15B

寿筵開大府。佳氣傍朝陽。雲近三台色。花分上苑香。館餐授金玉。内集見琳琅。啼鳥隨琴和。新春入酒長。天応綏有徳。誰不願無疆。東閣從延客。南山樂獻觴。

猗蘭膝公六十寿宴序

本多猗蘭侯と服部南郭

年、寛延に紀し、歳、庚午に次る（寛延三年一七五〇）、猗蘭侯、寿、甫めて六十なり。華誕の辰、本、六月に在り（侯は六月十八日生。燕喜の日、前めて上春を用う。公、職を秉つて久しく兩朝の政に参し、治を輔け既に必世の仁を敷く。躬ら行年の化を履み、耳、庶事の間に順うなり。率由（したがひよること）を旧章に明らかにし（孟子離婁篇に率由先王旧章とある）、孚先（まことをもって君に仕え後人の先達となること）の故老と称す。是を以て、良弼（よい輔弼の臣）、砺と作るの望、時に已に益々切なり。康侯（国を安んずる大名）、馬を錫うの栄、日に用つて落庶なり（易经、晋卦、康侯用錫馬蕃庶）。況んや夫の群公諸伯、同位敵体の交、府僚門下、攀龍附鳳の属、使客、踵を接し、玉帛、庭に盈つ。其の徳の弥いよ効（徳の善美をいう）を申慶し、其の禧の延長を称願す。至らざること莫し。固より知るべきなり。而して公の享福、人の太だ羨むところのものは、多く斯の男、尽くこれ象賢、令子女、共に淑徳たるに如くは莫し。振々焉繩々焉たり。是の日や、一堂に群集し、更ごも万祉を奉ず。彩服を舞わして以て承顔し、瓊觴を称して愉色あり。琴瑟、御に在り、冠笄、前に満つ。且つ公、文徳の育するところ、才美相紹ぎ、雅歌、永言し、篇章、仕を成す。亦皆、愛を致して自ら尽し、他に求むることを待たず。夫の芳鮮清酤、玉食の珍、綺筵繡器、華堂の飾の若きは、固より自ら維辟（諸侯）の常にして、称するに遑あらざるなり。加旃、条風、時令に協うて以て徐るに至り、天日、春和を待つて愈々輝く。玉樹を吹いて交々開き、白華の並びに潔きを照す。公、乃ち、怡然として座に臨み、陶爾として杯を挙ぐ。其の雍熙に膺り、其の孝養に飽く、人倫の至樂、侯家の盛歎なりと謂うべし。喬、猶お幸に犬馬の齒（自分のよわいを謙遜していう）、松柏の姿を瞻仰（仰）す。前に已に再び賀辞を進む。今にして三たび令節に逢う。茲に老いたりと雖も言なかるべけんや。重ねて嘉祥を序し、永く朋寿を冀う。聊か九如（天保九如）の祝に托して、綴るに六韻の詩を以てす。

寿筵、大府を開き、佳氣、朝陽に傍う。雲は近し、三台の色、花は分つ、上苑の香。館餐、金玉を授け、内集、琳琅を見る。啼鳥、琴に従つて和し、新春、酒に入つて長し。天は応に有徳を綴んずべし、誰か無疆を願わざらん。東閣、延客に従つて、南山、猗蘭侯を樂しむ。

この寿序は寛延三年の作で三寿序の中でもとくに文章が妍麗でいかにも寿序にふさわしい。この六十寿序には、南郭の白書したものが現存する。早稲田大学図書館に所蔵されるもので、六十寿宴序并詩を毎行四十七字十一行に書いて、末尾に猗蘭侯公六十寿宴序并詩と題し、服元喬の署名と印記がある。文字の異同はほとんどなく、ただ集の莫不至矣を靡弗至矣に作るの異なるだけである。南郭の小楷の書はめずらしく、鍾王の遺を得たものとしてよいであろう。あるいはもと本多家にあったものかもしれない。服部匡延著、「本館所蔵服部南郭漢文墨蹟二点」参照。

題跋

南郭が猗蘭侯のために書した題跋、および猗蘭侯に関する題跋がある。

為西台侯「跋三画卷」二編八17B

書画雖_レ物。亦有_レ知哉。神物而落_ニ俗手_一。可_レ謂_ニ一厄_一矣。狩氏所藏。宋梁楷画蠶圖。相伝以為_ニ横披三幅_一。蓋絶品也。西台侯覽而愛_レ之。令_ニ良工摸_レ之。它日至。則裝作一軸。首末既具。大增_ニ神彩_一。侯曰。世以_ニ碎錦_一玩_レ之。可_レ惜也。神物終当_レ合。此且雖_レ摸。不_四亦足以雪_ニ其冤_一哉。余曰。顧虎頭所謂妙画通_レ靈。猶_ニ人之登仙_一。豈是乎。侯乃笑。蓋侯所_レ好雅古。異_ニ於世俗_一。非_ニ独其学_一矣。

これは猗蘭侯が、宋の梁楷画の蠶圖横披三幅を見て、良工に摸写させたものに、南郭が跋した文である。南郭は詩文よりも画の方に興味があったらしく、今、服部家にも南郭筆の画を存する。増上寺忍海筆画龍圖の賛、山水圖、雪梅圖などがそれである、(江戸時代図誌、江戸篇に紹介)。画業の師とする所は明らではないらしいが、本多猗蘭侯も画をよくし、今、河内長野の延命寺にある墨梅圖は、南郭の雪梅圖とよく似ている。日本における江戸時代の文人画の初期の題材で、両家に共通するものがあることを感ぜしめる。猗蘭侯の画師も未詳であるが、あるいは南郭と関係があるのではないかと思われる。

跋三膝公艸書墨本一 三編九7A

猗蘭膝公艸書。咸称_ニ絶妙_一。而以_ニ其不可_一容易得_ニ焉_一。人情飢渴。益苦_レ難_レ得也。益欲_レ得_レ之多方矣。有_ニ因_ニ烏石之癖_一。獎成以_ニ図_ニ墨刻_一者_上。丁巳之冬。懷仙樓再成。諸子会飲。膝公贈詩適至。即展_ニ開之_一。烟雲縹緲。殊極_ニ変態_一。烏石因_ニ乞_ニ諸主人_一而刻_レ之。已成。神彩飛動。毫不_レ損焉。刻亦工哉。此可_ニ以弘_ニ其觀_一。但未_レ知世書家拘執。能知_ニ此真仙中物_一否。

猗蘭侯の草書はみなが絶妙であると称していたが、容易に手に入らない。手に入らぬとなると、ますます欲しくなるものである。そこで松下烏石が、そのお手のもの墨刻でこれを刊行しようという。たまたま、丁巳(元文二年一七三七)の冬、懷仙樓(越智雲夢の室名)が再び成る(再建されたか)というので、諸子が会合したとき、猗蘭侯の詩が出来上った。その書が「烟雲縹緲、殊に変態を極む」というすばらしい作であったので、烏石がこれを刻した。その神彩飛動し、毫も損せずという巧妙さであったという。これによって猗蘭侯の草書の墨拓法帖があった

本多猗蘭侯と服部南郭

ことがわかる。

猗蘭侯の草書が絶妙であることは、実例によって觀賞すべきであるが、近ごろ山内香雪軒旧蔵の侯の草書詩巻を得た。七律一首を揮毫したもので、塵俗を脱離した天然率意の作で、米芾を想わせる。草書を絶妙と称せられる所以を知ることのできる作である。詩は「玉軫青尊携共行、醉醒何処不秋情、雲低葛嶺天中雷、濤捲浪華海上城、握手交游皆少壯、老毫詞賦孰高名、赤峰自古多松樹、風好時聞秦氏声」という。これは集に収められていない佚詩のようである。

烏石書碑帖跋 三編九 8 B

烏石山人書名曰盛。而其徒巧作墨本。苟有完篇。必墨而帖之。初是碑新鐫未立。烏石之徒私欺石工。輒就其優。急打數本。洗刷其跡。不令人知。然後剪截作帖。乃始示諸衆。及其之覺。衆惆悵焉。既不復得矣。物先生碑。猗蘭侯文。人愈欲之。而其不可復得也。益貴矣。余乃為跋其帖。好事也夫二三子。亦是風流罪過爾。

これは松下烏石が荻生徂徠の墓碑を墨拓法帖にしたものに南郭がかいた跋である。松下烏石は書名が日に日に盛んで、その門下のものが墨本（墨拓の法帖）を上手につくることができる。完成された作があると、必ず墨拓にして法帖としている。碑を刻してまだ立碑していないときに、烏石の門人が私に石工を欺いて、その横なりに置いたままの碑石から、急いで拓本をとり、その碑石をきれいに洗い清めておいて誰にも気づかれないようにする。そうしてその墨拓を剪装して法帖を作って皆のものに見せる。その始末を知って、みなものが口惜しがすが、そのときはもうどうにもならない。物徂徠の碑は猗蘭侯の文で、欲しい人はたくさんあるが、もう手に入れることはできないので、いよいよ貴重なものとなる、という。論集前号に述べた、徂徠の墓碑銘が珍重され、烏石によってこっそり上石されていることがこれにてわかる。

ただ、猗蘭侯が徂徠の墓誌を書いたのは、その銘文に徂徠の没して十一年後の元文四年の年記があり、早くに墓表は出来ていて、のちに墓誌銘が刻されたことになる。従って上記の烏石の刻本のことも、徂徠の墓碑に関しては、その立碑の前に作ったことは疑わしい。猗蘭侯の徂徠墓誌については、「服部匡延氏、服部南郭漢文墨蹟二点」の論文に、太宰春台の南郭あての書牘を引いた論説がある。

猗蘭侯の墓誌と碑文

故神戸侯長徳公墓誌 服部南郭撰 四編七9B

公諱忠統。字大乾。藤姓。族本多氏。公考松巖公諱忠恒。分自本藩江州膳所。食封河州西台。公以元禄四年辛巳六月十八日。生於膳所。母安井氏。宝永元年先考没。公嗣。時年十四。四年丁亥。入為替御于

憲廟。其年叙爵称伊予守。六年癸巳。

憲廟上賓。公出以列侯就鴈班。歷

文廟

章廟至

德廟。享保四年。再入為大番帥。八年。謝病出就帝鑑班。九年復起以兼鴻臚領祀典。与聞郡国事。尋遷執事。参政府。執事職重事劇。公從政幾三十年。恭謹無私。承式毗翼。德量才幹。通知大体。以簡御煩。府事大治。朝野籍籍称良執事。其詳徧存口碑。言之短。不能具列。延享二年。以功勞益封。移食勢州神戸城。三年。以病乞解職。復就帝鑑班。尋乞老。當高阡別邸而隱焉。

公少好文雅。長益篤。受學物子。号猗蘭。中間雖在繁職。其業不廢。以故著述頗富。有文集十七卷。曰猗蘭台集。猗蘭子三卷。皆已行世。絲竹書画。兼善衆芸。性喜清静。榮寵如遺。既隱。自称拙翁。閉門謝客。專樂恬退。世益高其操尚。宝曆七年丁丑二月念九日。終于別邸。得年六十七。葬江東靈巖寺。法諡曰長徳公。初聘水口侯女。未迎而卒。後不再娶。男十人女十人。皆庶出也。長子康桓。出繼膳所侯。称下総守。次信胤。為勝山侯嗣。卒。次忠篤。先為世子。称兵部少輔。亦卒。次忠榮。承族氏。称左京。次忠永。嗣神戸侯。称丹後守。第七男。入祓。為京師若王子寺主。名賞深。第八男忠節。以公族大夫事膳所。併其餘。先没五人。長女為一品吉田公夫人。次以次適貴家室者六人。季女未嫁。餘亦先没。詳具別譜。

銘曰。政績效功。立言鄰徳。清静保明。維學為殖。

故神戸侯長徳公墓誌

本多猗蘭侯と服部南郭

公、諱は忠統、字は大乾、藤姓、族は本多氏。公の考は松巖公、諱は忠恒、本藩江州膳所より分れて、封を河州の西台に食む。公、元禄四年辛巳六月十八日（一六九二）を以って、膳所に生る。母は安井氏、宝永元年（一七〇四）先考没して、公、嗣ぐ。時に年十四。四年丁亥（一七〇七）、入りて憲廟（將軍綱吉）に替御（御小姓役）たり。其の年、叙爵して伊予守と称す。六年、癸巳（己丑、一七〇九）、憲廟上賓（崩す）し、公、出でて列侯を以って鴈班（大名の列伝）に就く。文廟（將軍家宣）、章廟（將軍家継）を経て。德廟（將軍吉宗）に至る。享保四年（一七一九）、再び入りて大番帥（大番頭）となる。八年（一七二三）、謝病して出でて帝鑑班に就く。九年（一七二四）、また起って、兼鴻臚（鴻臚は寺社奉行の唐名に用いる）を以って祀典を領し（奏者番兼寺社奉行となる）、郡国の事を与り聞く。尋いで執事（若年寄）に遷り、政府に参す。執事、職重く事劇し。公、政に従うこと幾んど三十年（寛延三年若年寄を退く）、恭謹して私なし。承式毗翼、德量才幹、大体を通知し、簡を以って煩を御し、府事、大いに治まる。朝野、籍々として良執事と称す。その詳なること偏く口碑に存す。言の短なる、具列すること能わず。延享二年（一七四五）、功劳を以って益封（禄高五千石加増）し、勢州の神戸城に移食す。三年（寛延三年一七五〇）、病を以って乞うて職を解かれ、復た帝鑑班に就く。尋いで老を乞うて、高戸別邸（高輪屋敷）を営み、而してここに隠る。

公、少くして文雅を好み、長じて益々篤し。学を物子（荻生徂徠）に受く。猗蘭と号す。中間、繁職に在りと雖も、その業、廢せず。故を以て、著述、頗る富む。文集十七卷あり、猗蘭台集という。猗蘭子三卷あり、みなすでに世に行わる。絲竹書画、衆芸を兼ね善くす。

性、清静を喜み、榮寵、遺たるが如し。既に隠れてみずから拙翁と称し、門を閉して客を謝し、専ら恬退を樂しむ。世、益々この操尚を高しとす。宝暦七年丁丑二月念九日（一七五七）、別邸に終る。年を得ること六十七、江東靈巖寺に葬る。法諡を長徳公という。初め、水口侯の女を聘す。未だ迎えずして卒す。後、再び娶らず。男十人女十人、みな庶出なり。長子康桓、出でて膳所侯を継ぐ、下総守と称す。次は信胤という。勝山侯の嗣（小笠原信成養子）と為る。卒す。次は忠篤、先に世子と為る。（元文二年忠統の三男忠篤を嫡子とした）。兵部少輔と称す。亦卒す。次は忠栄。族氏を承け、左京と称す。次は忠永、神戸侯を嗣ぎ、丹後守と称す。（延享四年八月嫡子忠篤が二十九歳で没し、五男忠永が世子となる。）第七男（忠明）は釈に入り、京師若王子寺主となる。名は賞深という、第八男は忠節、公族大夫を以つ膳所に事う。その餘を併せて、先に没する五人。長女は二品吉田公夫人となる。次は、次を以って貴家の室に適くもの六人。季女、未だ嫁せず。餘も亦先んじて没す。詳らかに別譜に具す。銘に曰く、

政績、功を效し、言を立て、徳に鄰る。清静、明を保し、維れ学、殖を為せり。

宝暦七年（一七五七）二月二十九日猗蘭侯画没せられ、東京深川の浄土宗の古刹靈巖寺に葬られた。ときに嗣侯の本多忠永が、侯の行状や本多家の系図などをもって、服部南郭に墓誌を依頼し、この墓の境内に埋められているという。今回、研究所の調査において、本多家の後裔にあたる本多康彦氏に同道して、猗蘭侯の墓に香華参拝した。墓は正面に、一行に長徳院殿前予州刺史浄誉拙翁円徹居士とある。墓壇の下に墓壇のあることも本多氏自ら説明があった。

神戸長徳公祠堂碑 服部南郭撰 四編八23 B

宝暦七年丁丑二月廿九日。故神戸侯長徳公。終于東都高阡別第。葬于江東靈巖寺。臨葬。嗣侯忠永具公行状譜第一。属喬為墓誌。即埋之。法諡曰長徳公。公諱忠統。字大乾。号猗蘭。享年六十七。其德善功烈。既詳其誌。是歲夏六月。嗣侯將還封于神戸。謂喬曰。嗚呼。往而不可再者親乎。格而不可度者神乎。既已皇皇如有望而弗至。弗忍一日離也。孤亦將遠歸。歸當為我公祠封邑而祭之。哀哉。春秋霜露之變。悽愴怵惕之心。孤將何以得優然必有見乎其位。何以得肅然必有聞乎其容声。愾然必有聞乎其歎息之声乎。惟是聞之故老云。神戸為城旧矣。往者織田氏霸也。滅勢州北畠氏之国。割其列城封子弟。神戸其一也。後及国初。屢易其主。寛永中。遂命毀焉。中廢百年。延享中。朝議令因旧趾復城。会我公以功勞益封。移食神戸。因命降我公。公時在職。不得就封。通制經營。至明年竣功。城隍門樓。煥乎壯矣。孤不佞忝承封守。尚得列于維城。奉國家之衛。則我公燕翼所至。貽厥所存。莫尚焉。致愛則存。愛之斯録之。豈知神之所饗。孤亦斯尽其道焉耳。是且可無記乎。喬曰。唯。然。是謂思成。請以紀其事為碑。乃相議石于神戸城北觀音寺。即公祠堂所設也。因作銘曰。

先侯益封。于邑神戸。有俶其城。既啓爾宇。肅肅厥功。先侯乃當。之屏之幹。屹列維城。先侯有神。乃眷茲壤。肇祀馨香。歆然降饗。土田広衍。山川鬱盤。維神攸寧。孫子亦安。

神戸長徳公祠堂碑

宝暦七年丁丑二月廿九日、故神戸侯長徳公、東都高阡別第に終る。江東靈巖寺に葬る。葬るに臨んで、嗣侯忠永、公の行状譜第一を具して、喬に属して墓誌を為らしむ。即ち之を埋む。法諡して長徳公と曰う。公、諱は忠統、字は大乾、号は猗蘭、年を享くこと六十七。その德善功烈、

既にその誌に詳らかななり。是の歳夏六月、嗣侯、將に封に神戸に還らんとし、喬に謂いて曰く、嗚呼、往いて再びすべからざるものは、親なるか。格して度るべからざるものは神か。既にして皇々（急がしいさま）として望みあつて至らざるが如し。一日も離るるに忍びず。孤（忠永）も亦、將に遠歸せんとす。歸つて當に我が公の爲めに、封邑に祠して之を祭るべし。哀しい哉。春秋霜露の変、悽愴怱怱の心、孤、將た何を以てか、優然（ほのかに見えるさま）として必ずその位に見ゆること有ることを得んか。何を以てか肅然として必ずその容声を聞くこと有り、愾然（ためいきをつくさま）として必ずその歎息の声を聞くこと有るを得んか。惟是れ之を故老に聞くに、云う、神戸の城たること旧し。往きに、織田氏の覇たるや、勢州北畠氏の国を滅し、その列城を割きて子弟を封ず。神戸その一なり。後、国初に及んで、屢しばその主を易う。寛永中、遂に命じて毀さしむ。中ごろ廢すること百年。延享中。朝議して旧趾に復た城づかしむ。会たま、我が公、功勞を以て、益封（加増）し、神戸に移食す。因つて命じて我が公に降す。公、時に職に在り、封に就くことを得ず、遥制して經營す。明年に至つて功を竣う。城隍門樓、煥乎として壮なり。孤、不佞、忝じけなく封の守を承く。尚わくは維城（城として衛りになるものをいう）に列して国家の衛を奉ずることを得れば、則ち我が公、燕翼（祖先が子孫を助け安んずること、詩經に見える）の至るところ、貽厥（子孫にのこす謀、詩經のことば）の存するところ、これより尚なるは莫し。愛を致すなれば則ち存す（礼記、祭義のことば）。之を愛すれば斯ち録す（礼記のことば）。豈に神の饗くる所なるを知らんや。孤も亦、斯に其の道を尽すのみと。是れ且つ記すること無かるべけんや。喬曰く、唯、然り。是を思成と謂う。請う以てこの事を紀して碑と為さん。乃ち相議して神戸城の北、觀音寺に石す。即ち公の祠堂の設くる所なり。因つて銘を作つて曰く、

先侯益封し、尸に神戸に邑す。その城を傲むること有り、既に爾の宇を啓く。肅肅たるその功、先侯乃ち營す。之の屏、之の幹、屹列たる維城。先侯、神あり、乃ち茲の壤を眷ん。肇祀馨香（祭祀を始め徳化が及ぶこと）、歆然として降り饗く。土田広衍、山川鬱鬱。維れ神の寧んずるところ、孫子も亦安し。

この碑文に依ると、神戸城の北、觀音寺に侯の祠堂が建てられて、この碑文が刻されていることになるが、先年、鈴鹿市神戸に觀音寺を訪れたが、本堂の脇に本多家歴代藩主の位牌は列なっているが、侯の祠堂は境内のいずれも見当らず、また建立された事情も明らかではない。實際上の事實は今なお未詳である。祠堂が成ったとすれば、一堂宇を建立して南郭撰文の碑をその中に収めたと思われるが、これについてはなお今後の研究に俟たねばならない。

芙蕖館帖

服部南郭関係の資料に芙蕖館帖とよんでいるものがある。天理大学付属図書館に所蔵されているものである。本年九月、大学の許可を得て閲覧することができた。この帖は、かなりの大きさの箱に収められていて、箱の表書きに「服部南郭旧藏、儒家手簡真蹟類二箱七卷」と墨書されている。昭和二十九年十二月廿八日の日付けがあり、このころに館に入ったものようである。七巻のうち、はじめの五巻が一括して収められて、あとの二巻は又別の小さい箱に収められている。五巻の方は、芙蕖館藏書全五巻、諸子遺墨巻軸目録一冊が添えられている。第一巻には、西台侯、周南先生、春台先生、東野先生、金華先生、万庵尊者、岡伯錫、宇士新、宇士朗、坂美竹、錦江先生、第二巻は高野蘭亭、岡田彦愛、広沢、左子巖、富春山人（田中氏）墨君徽以下、毎巻数十人前後の書蹟を収めている。みな南郭にあてられた書蹟のたぐいで、さすがに護國門の人が多い。第四巻には、松下烏石の奉哭南郭服夫子と題し、葛辰拝書とある楷書の詩草があり、南郭の没したときに奉呈されたものもあって、南郭の没後に集められたものである。猗蘭侯の書は巻首に三通あり、第一通は、正月五日、子遷あてのもので「條風深至也日暖氣和迄至如欲風乎舞雩也」云々とあり、花の紋様のある詩箋を用いている。この書牘は猗蘭台集二稿五16 Aにある寄子遷書牘と、文章はよく似ている。多少の異同があるが、多分同じときのものであろう。第二通は「統也情夫何足与論才」云々とある長文の書牘で、おわりに、南郭詞兄足下、友弟忠統頓首とある。これも猗蘭台集巻七15 Aに、復南郭とある文に相当する。これも多少文字の出入がある。これは文字も小さく書かれている。第三通は「甚哉俗紛妨乎大雅未聞雅之妨俗俗之所為乎」云々とあるもので、三月十九日付けになっている。これも猗蘭台集二稿五17 Aに、与子遷と題する書牘と文章がほぼ同じである。又、この巻の平野金華のものは、西台侯あてになっているから、これも忠統公の関係資料である。別箱に遺愛二巻と題して、別の二巻が収められている。一巻は荻生徂徠の書牘ばかりを集め、又一巻は王侯帖という表題があり、南郭の交遊した王侯の、南郭にあてたものを集めている。この中にも猗蘭侯の書が一通ある。「雖雪而天氣澄和」云々とあり、正月五日の日付である。これも猗蘭台集二稿五28 Aにあるものに該当する。王侯帖にはまた本多康桓（忠統公の兄で膳所侯を嗣いだ人）の書が二通あり、このほか猗蘭侯と交遊のあった大名たちの書が見られるなど、ゆたかな資料が集められている。芙蕖館帖の中の猗蘭侯関係の重要なものは以上の如くであるが、なお間接的な資料はきわめて多く、今後の研究が期待される。

この論文を書くに当って、服部家の服部元義氏をはじめ、水田紀久氏、日野龍夫氏、服部匡延氏、金子宏二氏の諸氏の御教示を得たことに厚く感謝の意を表する。

本多猗蘭侯と服部南郭